慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治前園芸植物渡来年表
Sub Title	Exotic garden flowers and trees brought in Japan : a chronology to 1868
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.42 (2007. 9) ,p.27- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20070930-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 42, 27–58（2007）

明治前園芸植物渡来年表

磯　野　直　秀

Exotic Garden Flowers and Trees Brought in Japan : A Chronology to 1868

Naohide Isono

我々は衣食住の各方面で数多くの植物を利用してきたが，そのなかには海外から渡来した種類が少なくない。農作物ではイネ・ムギをはじめ，キュウリ・カボチャ・ナス・トマト・サツマイモ・ハクサイ……，果物ではイチゴ・ミカン・リンゴ……など，キノコや藻類を除く食用植物はほぼ全てが外来品だし，工芸作物もアイ・コウゾ・ミツマタ・ウルシ・ハゼノキ……，薬草もチョウセンニンジン・カンゾウ・ニッケイ・ハズなど，海外から持ち込まれた種類が多い。鑑賞用の樹木も――ウメ・レンギョウ・モクレン・キョウチクトウ・サルスベリ・シダレヤナギ・イチョウ……，草花――スイセン・マツバボタン・ヒマワリ・オシロイバナ・ホオズキ・アサガオ・ヒガンバナ・キク……と，馴染み深い種類が軒並み渡来品である。

このような渡来植物がいつ頃に伝わったかを明らかにすることは，博物誌や文化史にとって重要な課題である。しかし，農作物・果樹・工芸作物・薬草木・庭木・草花を一度にまとめても複雑になるばかりなので，本稿では観賞用園芸植物を中心とし，その周辺（野菜や果物など）も多少取り上げて年表化するに留める。また，期間は奈良時代から江戸時代末までとする。

それを時代別に主要資料と主要渡来品について概観すると――

①奈良・平安時代：草木の種類を確認するには図，あるいは形状の詳細な記述が必要だが，この時代にはそのような資料が皆無に近い。したがって，史書（古事記・日本書紀……）や，古典文学（万葉集・枕草子・源氏物語……），辞書の類（新撰字鏡・本草和名・倭名類聚抄……）などに記されている植物名を拾うほかないが，当時の名称が近世～現代とは異なる場合が少なからずあるし，写本で伝わる辞書類では後世の追加が間々あり，注意を要する。

この時期の渡来品は，ウメ・キク・ケイトウ・シダレヤナギ・ボタン・バショウ・アサガオ・ザクロ・シモクレン・シャクヤク・ジュズダマなど（ほぼ年表の順，以下同じ）。

〒232–0066　横浜市南区六ツ川3–76–3–D210，慶應義塾大学名誉教授。（76–3–D210，3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.）［Received Jan. 16, 2007］

②鎌倉時代：平安時代に引き続いて，史書や文学作品，辞書，日記類が主要な資料だが，絵巻物などに残る図から渡来植物が確認できる事例が多少加わる。

チャ・コウシンバラ・ナンテン・フヨウ・ムクゲなどが，この頃に渡ってきた。

③室町時代〜安土桃山時代：『往来物』（当時の教科書）や『節用集』系の辞書，日記・日録（看聞御記（かんもんぎょき）・お湯殿の上の日記・山科家礼記（やましなけらいき）・蔭涼軒日録ほか）や，生花書が数多く残っており，好資料となる。それを調べてみると，従来江戸時代に渡来したとされてきた種類で，この頃すでに持ち込まれていた草木が多いことがわかってきた（磯野2006）。また，寺社などに残る絵画・彫刻資料も役立つ（植物文化史）が，画家のスケッチは僅かしか現存しないようである。

この時代に渡来したのは，イチョウ・スイセン・ホウセンカ・ジンチョウゲ・ヒガンバナ・ロウバイ・ソテツ・シュンギク・カボチャ・タバコ・トウガラシなど。

④江戸時代－1（17世紀）：宣教師が出版した『日葡辞書』や，俳書『毛吹草』『増続山ノ井』は，日常的に使われていた植物名を数多く含む優れた資料となる。また，画家のスケッチ集（狩野探幽・狩野常信・狩野重賢）も多くの渡来植物を含む（植物文化史，磯野2004A・B）。これらを調べて，いろいろな種類が従来言われていたよりも早く到来していたことがわかった。そのほか，本草漢和辞書といえる『多識編』や，初の百科図鑑『訓蒙図彙』，園芸書の元祖『花壇綱目』および『花壇地錦抄』も資料価値が高い。

イチジク・サツマイモ・シュウカイドウ・サルスベリ・アラセイトウ・センニチコウ・レンギョウ・トマト・ヒマワリ・ハクモクレン・エニシダ・オシロイバナなどが到来。

⑤江戸時代－2（18世紀）：この世紀の初頭に出版された『大和本草』『地錦抄附録』などに，17世紀の渡来に関する記事が少なからず見られる。また，18世紀前半には徳川吉宗政権の薬材政策のもとで中国・朝鮮からさまざまな薬草木が取り寄せられたが，それについては小石川薬園・駒場薬園・京都鷹峯薬園の記録や，『九淵遺珠』『物類品隲』の記事が役に立つ。琉球から薩摩藩に渡った種類については，曽占春がさまざまな著作に残した記録や，上野益三著『薩摩博物学史』が参考になる。

キョウチクトウ・キンシバイ・ニチニチソウ・ハボタン・トウカエデ・モウソウチク・チョウセンアザミ（アーティチョーク）・ギョリュウ・モッコウバラ・ガジュマルなどが渡来。

⑥江戸時代－3（19世紀）：19世紀に入ると新来の植物が急増するが，文政末年（1829）頃までは琉球や中国南部あたりから持ち渡られた種類が目立ち，以後は蘭船の船載品が多いように思われる。ついで安政6年（1859）の開港の後は，遣米使節と遣欧使節が何百種類もの種子を持ち帰るなど，怒濤のごとく欧米の園芸植物が入ってくる。この世紀には多くの植物図譜が作成されたが，『草木錦葉集』『本草図譜』『梅園草木花譜』は文政・天保（1818〜43）頃までの，『遠西舶上画譜』『新渡花葉図譜』『本草写生図譜』はそれ以後の状況をよく伝える。このほか，弘化2年（1845）の「異国草木会」の記録や，安政6年（1859）に作成された「天保度後蛮舶来草木銘書」も有用である。また，遣米使節と遣欧使節の持ち帰った種類については，近年，遠藤正治氏が詳細な検討を続けられ，その全容がほぼ明らかになっている

（遠藤2000～01）。

前半では，ノボタン・キズイセン・ムラサキオモト・さまざまな東洋蘭が入る。天保末から幕末には，ダリア・オジギソウ・クローバー・マツヨイグサ・カンナ・キンギョソウ・フクシア・リュウゼツラン・コスモス・スイートピー・パンジー・マツバボタン・ラベンダー・チューリップ・ゼラニウムなど，いまも身近な種類が並ぶ。

凡例

1　本年表は，古代～江戸時代末に渡来した草花・庭木類を主な対象とするが，その周辺の馴染み深い農作物や果物も多少含めている。また，琉球や薩南諸島からの渡来，時には九州最南部産の種類も取り上げた。なお，紙数の制約から，大半の事例では原産地を省略した。

2　年表には，これまで調べたうちで，もっとも古い記載・絵画資料などの例を挙げた（波線を付した事例）が，それ以後の記載例や図示例，国内での移動も適宜採録した。

3　品名欄：原則として，まず現和名（片仮名）を挙げ，（　）内に原記載名や漢字名，異名を記した。下線を付したのは原記載名やその振仮名である。原記載名が現和名と同じか，それに近い場合は，原記載名を略した。同一項に複数の品名を挙げた場合は，原則として五十音順としたが，例外もある。

4　注記欄：誰が写生したか，どこから渡来したかなどの要点を記し，（　）内に出典・文献を示した。（梅園草木花譜・春２）の「春２」，（常信写生図巻５）の「５」などは巻次である。『植物渡来考』『資源植物事典』『本草図譜・解説』などには渡来記事の出典を挙げていない場合があるが，そのまま引用して，出典を今後の探索に譲った。また，「➡西暦年」はその年に関連記事があることを示す。

5　漢名に対する和名は，『[改訂増補］牧野新日本植物図鑑』『本草の植物』『植物文化史』などに拠った。

6　『古事記』『日本書紀』『万葉集』『枕草子』『源氏物語』などに出る品名は『古典植物事典』に準拠した。

7　『草木花写生図巻』『大和本草』『花木真写』『花彙』『草木錦葉集』『本草図譜』『草木図説・木部』『本草写生図譜』などに収録されている種類の現和名は，影印本・翻刻本における同定にしたがった。

8　出典に「○○年渡来」とあっても，それが江戸・京都・尾張などに移入された年を指すらしいことがあるが，原記載に明記されている場合を除き，一々断ってはいない。

9　スケッチ集と日記の記録は，月日まで記した。

10　引用文中の［　］は磯野の注記である。

11　品名の掲出年索引を，稿末に付した。

和暦	（西暦）	品名	注記・出典
慶雲 2	(705)	• ウメ	葛野王（本年没）の『懐風藻』所収詩文に初出。
和銅 5	(712)	• アズキ（小豆）・ダイコン（おほね＝大根）・ダイズ（まめ）・タチバナ・ハス（はちす）・ヒョウタン（ひさご）・ホオズキ（あかかがち）・ムギ・モモ	本年撰上の『古事記』に名が出る／ハスとヒョウタンは縄文・弥生時代に導入されたと考えられている。
養老 4	(720)	• ウルシ・クワ・スモモ・ニワウメ（はねず）	本年撰上の『日本書紀』に初出／「はねず」をニワザクラとする見解（植物渡来考）もある。
天平 6	(734)	• チシャ（苣）・ナス（茄子）・フユアオイ（葵）	正倉院文書「造仏所作物帳」に記載がある。
天平勝宝 3	(751)	• キク・シダレヤナギ（柳）	本年成立の『懐風藻』に名が出る。
天平宝字 2	(758)	• カキ・ナツメ・ミョウガ	正倉院文書「銭下充帳」に記載がある。
延暦 3	(784)	• キュウリ	奈良時代（710～本年）の平城宮遺跡で多数の種子が発見された（平城宮発掘調査報告Ⅱ）。
延暦 4	(785)	• カラタチ・ケイトウ（唐藍）・シダレヤナギ・フジバカマ・ベニバナ（末つむ花）・ヤブカンゾウ（萱草，わすれぐさ）	大伴家持（本年没）編『万葉集』に名が出る／キクやボタンを詠んだ歌は一つも無い／八重のヤブカンゾウは中国原産の史前帰化植物，一重のノカンゾウは別の変種で日本に自生（四季の花事典）。
延暦18	(799)	• ワタ	三河国に漂着した崑崙人（インド人）が種子を伝え，太宰府・紀伊・四国に植えた（類聚国史）が，やがて絶えた。
延暦24	(805)	• チャ	最澄，唐より茶を持ち帰るが，部分的にしか拡まらない。
大同 1	(806)	• ボタン	空海，唐より薬用に牡丹を持ち帰る（四季の花事典）。
弘仁 9	(818)	• シャクヤク（芍薬）・バショウ（芭蕉）	本年成立の『文華秀麗集』に名が出る。
延喜14	(914)	• アサガオ（けにごし＝牽牛子）・アンズ（からもも）・シオン（しをに）・ハチク（くれたけ）・バラ（さうび＝薔薇）	この頃成立の『古今和歌集』に所収／ハチクは淡竹で，次項『本草和名』に「淡竹，くれたけ」とある／薔薇はゴヤバラかコウシンバラ（長春花➡1213）という（植物渡来考，本草の植物）／ボタンやシャクヤクは詠まれていない。
延喜18	(918)	• アブラナ（芸薹をち）・イチビ・エンジュ（槐え）・カジノキ（柁かち）・キリ・ザクロ・シモクレン（木蘭）・ジュズダマ（薏苡つしたま）・シュロ（棕櫚すろのき）・タチアオイ（蜀葵からあふひ）・ノウゼンカズラ（のうせう）・ビワ（ひは）・ホウキギ（地膚まきくさ）・ボケ（もけ）・ユズ（柚ゆ）・ワリンゴ（林檎）	この頃成立の『本草和名』に左記の品を収録する／アブラナ➡1181（なたね），1592
承平 5	(935)	• キンセンカ（金銭花）・マダケ（苦竹，かはたけ）	この頃成立の『倭名類聚抄』に名が出る。古代にホンキンセンカ Calendula arvensis が入り，いま普通のトウキンセン C. officinalis の渡来は幕末とされる。➡1830～43
天禄 2	(971)	• ボタン（ぼうたん）	『蜻蛉日記』6 月条に，花の描写がある。

長保 3	(1001)	● カラナデシコ（石竹）・ハゲイトウ（かまつかの花）・ユウガオ	この頃成立の『枕草子』に名が出る。
寛弘 4	(1007)	● ケシ・トコナツ	この頃成立の『源氏物語』に名が出る。
大治 3	(1128)	● ニワザクラ	本年頃成立の歌集『散木奇花集』に名が出る（花木園芸）。
永暦 1	(1160)	● バショウ	この頃までに描かれた『鳥獣戯画』甲巻に図がある。
養和 1	(1181)	● アブラナ（芥子なたね）・エンドウ（園豆）	本年頃作成の『色葉字類抄』に収録。「ナタネ」の呼称は初出。
文治 2	(1186)	● ブドウ	この頃，甲州で葡萄栽培が始まる（農業事物起源集成）。
建久 1	(1190)	● ボダイジュ（菩提樹）	栄西，宋から種子を日本に送る（植物渡来考）。
建久 2	(1191)	● チャ	栄西，宋より茶を持ち帰って広め，定着させる。➡805
建保 1	(1213)	● コウシンバラ（長春花）	『明月記』12月16日条。➡914注記
承久 1	(1219)	● ザクロ	本年成立の『北野天神縁起』に絵がある（本草の植物）。
寛喜 2	(1230)	● ナンテン（南天竺）	『明月記』6月20日条。
弘安 4	(1281)	● フヨウ（芙蓉ふよう）・ムクゲ（木槿むくげ）	1274～81間に成立したとされる『塵袋』に名が出る。
延慶 2	(1309)	● コウシンバラ・ニワザクラ	本年成の『春日権現験記』に描かれている（本草の植物，本草図譜88解説）。➡1128，1213
貞治 5	(1366)	● ニワウメ（庭梅）	本年成の『詞林采葉抄』に「ニハウメ」の名が初出。古くは「はねず」と呼んだらしい（花木園芸）。➡720
永和 4	(1378)	● センノウ	『後深心院関白記』8月3日条に「せにをうくゑ……近来出来」とある。
応永 7	(1400)	● カリン（花梨子はななし）	14世紀後半に作られた『庭訓往来』に名が出る。
応永31	(1424)	● ラカンマキ（羅漢槙）	11月26日，禁裏に「羅漢樹」2本を植える（看聞御記）。
文安 1	(1444)	● イチョウ（銀杏いちやう）・カイドウ（海棠）・キンカン（橘柑きんかん）・スイセン（水仙花）・碧桃・ムクゲ（槿花むくげ）・モクセイ（木犀）	本年成立の部類別辞書『下学集』に所収／当時の海棠はミカイドウで，ハナカイドウは江戸時代の中頃に渡来という（四季の花事典）。➡1746，1822／碧桃は白花の桃／モクセイ➡1492，1713注記，1719
文安 3	(1446)	● ハナズオウ（紫荊）	本年成の『壒嚢鈔』に漢名が載るが，和名は欠く。
享徳 3	(1454)	● ホウセンカ（鳳仙花）	本年序の部類別辞書『撮壌集』に名が出る。
文明10	(1478)	● ワリンゴ	『お湯殿の上の日記』6月1日条に「二そん院より，りんご一折」とある。
文明13	(1481)	● アオギリ（梧桐）・ケマンソウ（花鬘花）・ジンチョウゲ（沈丁花）・チャンチン（椿）	一条兼良（本年没）著『尺素往来』に名が出る。「春菊」も記されているが，現在のシュンギクではないらしい（植物文化史）。
文明16	(1484)	● チョウセンアサガオ（曼陀羅華）・ヒガンバナ（曼殊沙華）・ロウバイ（蝋梅）・酔楊妃（菊花銘）	辞典『温故知新書』（本年序）に収録。
文明年間 (1469～86)		● ワタ	この頃，種子が再来か（資源植物事典）。江戸時代に木綿の生産が盛んになる。➡799，1860
長享 2	(1488)	● オウバイ（わうはい＝黄梅） ● 高麗菊	1月10日，宮中での立花に使用（山科家礼記）。 『蔭涼軒日録』3月22日条に「高麗菊」の語が初出するが，現在の春菊の異名か，別の花を指すかはわからない。

		●ソテツ	『蔭涼軒日録』９月16日条に，「大内庭ニ，ソテツト云草アリ，自二高麗一来」とある。
延徳２	（1490）	●ガンピ（鴈飛，ナデシコ科）	６月18日，蔭涼軒にガンピなどが贈られる（蔭涼軒日録）。
延徳３	（1491）	●シャガ	１月14日，宮中での立花に使用（山科家礼記）。
		●ハクチョウゲ	４月22日，宮中での立花に使用（山科家礼記）。
		●コウシンバラ：白花	４月24日，宮中での立花に使用（山科家礼記）。➡1213
		●コカキツバタ（小かきつはた）	『山科家礼記』４月28日条。➡1725
		●ゼニアオイ（小葵）	５月24日，宮中での立花に用いる（山科家礼記）。
明応１	（1492）	●オニユリ（鬼百合）	５月15日，『蔭涼軒日録』に「似二鬼百合一」の叙述がある。オニユリは食用に栽培されたが，朝鮮が原産地かという。
		●ギンセンカ（てうろさう＝朝露草）・ネジアヤメ（はりん＝馬藺）	５月24日，宮中での立花に使用（山科家礼記）。
		●ギンモクセイ・ゴジカ（午時花）・トロロアオイ	土佐広周（本年没）画『四季花鳥図』に描かれている（植物文化史，本草図譜80解説）。
明応５	（1496）	●太白（菊の品種名）	『お湯殿の上の日記』９月18日条。
明応９	（1500）	●イチハツ（一八）・クネンボ（九年母）・シュウメイギク（秋冥菊＝秋明菊）・テッセン（鉄線花）	『文明本節用集』（15世紀末頃成立）に収録／クネンボは食用以外に斑入品が鑑賞された➡1827／秋明菊は山城貴船に野生化したものが多いので，別名「貴船菊」。『和漢三才図会』（1713刊）に「貴布禰菊」が初出。
		●ブッソウゲ（仏勝花）・マツリカ（末利花）	本年頃の成立とされている『新撰類聚往来』に名が出る。ブッソウゲ➡1544
大永５	（1525）	●ゲンゲ	土佐光信（本年没）画『花鳥草虫図』に出る（落葉）。
天文13	（1544）	●ブッソウゲ（仏笑花＝仏桑花）	『言継卿記』５月７日条に「仏笑花二枝進上」。以後10年間に計16回，この花の記事が出ており，言継卿が連年栽培していたことが明らか。冬を越す秘策があったのか，この「仏桑花」が現ブッソウゲとは別の花なのか。➡1500
天文19	（1550）	●テッセン（鉄線）	『土佐絵画資料：植物写生帖』に，この年の写生が残っている（榊原1995）。➡1500
永禄６	（1563）	●シュンギク（春菊，別名高麗菊）	『お湯殿の上の日記』４月５日条に「かうらいきく［高麗菊］」，同４月13日条に「しゆんきく」と記されている。そのいずれか，あるいは両者ともが現在のシュンギク（古別称，高麗菊）を指すと思われる。
天正４	（1576）	●ジャガイモ	本年渡来（長崎年暦両面鏡）というが，欧州への移入・伝播（1580年代）を考えると早すぎる。慶長３年（1598）とする説（牧野新日本植物図鑑）などの異説もある。
天正７	（1579）	●カボチャ（ニホンカボチャ）	種子が渡来（長崎年暦両面鏡）。➡1608
		●トウモロコシ	ポルトガル船が長崎にもたらす（資源植物事典）。
文禄１	（1592）	●アブラナ（アフラナ）	４月27日，『多聞院日記』本日条に名が出る。本種は古く『本草和名』（➡918）に「芸薹をち」，ついで，『色葉字類抄』（➡1181）に「ナタネ」（菜種）の名が現われるが，「アブラナ」（油菜）は後発名だったらしい。
文禄４	（1595）	●オリーブ・マルメロ	メキシコから長崎に持ち渡ると『日本王国記』訳本に記す。

		●ソラマメ・ブッシュカン・ヘチマ	本年刊の『ラホ日辞典』に名が出る。
文禄年間（1592〜95）		●タバコ・トウガラシ	同時に渡来したという（成形図説）。両種とも異説が多いが，文禄・慶長年間頃の渡来は間違いないだろう。
慶長３	（1598）	●トケイソウ（時計草）	秀吉時代（1582〜本年）に渡来したという（草花図譜）。
		●セロリ（清正人参，オランダミツバ）	朝鮮に出兵していた加藤清正が持ち帰ったという（本草図譜47）が，匂いが嫌われて食用にはせず，薬用であった。
慶長４	（1599）	●タバコ	種子を輸入し，長崎桜馬場で栽培（長崎年暦両面鏡）。
慶長８	（1603）	●ジオウ（地黄）・ナタマメ・ニガウリ（ツルレイシ）・ビヨウ（ビヨウヤナギ）・ボンテンカ・ユスラウメ	左記は本年刊の『日葡辞書』における記載名／「ビヨウ」の注記は「花の咲く柳の類」／「ウコン」の名も収録されているが，これは薬物を指すので，本項に挙げない。
慶長13	（1608）	●カボチャ	本年建立の北野天満宮の欄間に彫刻がある（植物文化史）。
慶長14	（1609）	●ブッソウゲ・マツリカ	12月26日，島津家久が駿府へ献上（実紀）。➡1500
慶長16	（1611）	●サンシチソウ（山漆草＝三七）	金森出雲守可重が家康に献上（駿府政事録，８月12日）。山漆は三七の異名（本草綱目）。
		●サツマイモ（琉球芋）	琉球に出兵していた薩摩藩士が持ち帰る（通航一覧４）。
慶長19	（1614）	●ミツマタ	製紙に用いたとの記録あり（資源植物事典）。
元和５	（1619）	●イチジク	本年離日したスペイン人アビラ・ヒロンの『日本王国記』訳本に「日本にはイチジクがある」旨の記述がある。
寛永８	（1631）	●イチジク（「無花果……一熟」）・シュロチク（櫻竹すろたけ）・ツルムラサキ（落葵）・ニンジン（セリニンジン）・ノゲイトウ・ホウレンソウ（菠稜，からな）	本年刊の『多識編』に名が出る／シュロチクはヤシ科で，カンノンチク（➡1688）と同属／ノゲイトウは渡来して野生化したのだろうという（本草図譜15解説）。
		●カザグルマ・テッセン・ハカタユリ	本年頃描かれた妙心寺天球院の襖絵にある（本草図譜29・51解説）／カザグルマは日本に自生するが，園芸品が中国から伝来か／ハカタユリは「博多百合」だが，中国産。漢名「百合」はこのユリを指したという（本草の植物）。
寛永９	（1632）	●ガジュツ（莪茂＝蓬莪茂）	この年以前に薩摩に入り，栽培（薩摩博物学史）。
寛永12	（1635）	●コリヤナギ（杞柳：誤用）	但馬国城崎郡で盛んに栽培する（日本物産年表）。原産地は朝鮮。樹皮を行李（コウリ）の材料とするのが和名の由来で，上記地域はこの頃から現代まで柳行李の名産地である。➡1825
寛永18	（1641）	●シュウカイドウ（秋海棠）	中国より長崎に渡来し，正保年間（1644〜47）より拡まる（水谷記聞：雑纂220に引用）。
寛永19	（1642）	●トケイソウ（時計草）	本年より前の作とされる延暦寺根本中堂天井画に図がある（植物文化史）。➡1598
寛永年間（1624〜43）		●ルコウソウ（カンボジヤアサガホ）	寛永年間に渡来（大和本草）。

正保２	(1645)	●カザグルマ・ゴジカ・コデマリ・サルスベリ（百日紅）・タチアオイ・トロロアオイ（とろろの花）ハカタユリ・ヒナゲシ（美人草）・ルコウソウ・レダマ	本年刊の『毛吹草』に左記の名が出る。それぞれの種類と呼称が広まっていたことを示す／カザグルマ・ハカタユリ➡1631／ゴジカ・トロロアオイ➡1492／レダマの名はポルトガル語・スペイン語の Retama に由来する。
		●サンダンカ（三段花）	琉球から初めて薩摩に渡る（薩摩博物学史）。
正保年間 (1644～47)		●サボテン（仙人掌）	正保年間に渡来（異国草木会目録）。➡1717
正保～万治年間 (1644～60)		●オランダセキチク（あんじやべる）・チャラン（茶蘭）・ナツズイセン（摩訶曼珠）・ハマナスまたはマイカイ（玫瑰）・西洋バラ（らうさ）	左記の植物が渡来（地錦抄附録）／オランダセキチクとセキチクの交雑により現在のカーネーションが作出された／『地錦抄附録』は「玫瑰」にハマナスの振仮名を付しているが，中国産の玫瑰（＝マイカイ：ボタンバラ）そのものが入った可能性もある（植物文化史）。
明暦３	(1657)	●スルガラン（蘭）	７月９日，狩野重賢が写生（草木写生・秋上）。中国南部・台湾原産だが，なぜ駿河蘭というかは未詳。➡1717
万治１	(1658)	●ノウゼンカズラ	７月１日，狩野重賢が写生（草木写生・秋上）。➡918
万治２	(1659)	●フジモドキ（しけんし＝しげんじ，別名サツマフジ）	２月11日，狩野重賢が写生（草木写生・春下）。
		●リュウガン（竜眼）・レイシ（荔枝）	薩摩藩，山川郷福元（のち山川薬園）に植える（薩摩博物学史）。
万治３	(1660)	●アラセイトウ（アラセイトウ）	３月20日，狩野重賢が写生（草木写生・春下）。
万治年間 (1658～60)		●アブラギリ	この頃の記録がある（資源植物事典）。
寛文１	(1661)	●ユスラウメ	５月25日，狩野探幽が写生（草木花写生図巻）。➡1603
寛文２	(1662)	●ゼニアオイ（こあおい，赤花）	５月11日，狩野探幽が写生（草木花写生図巻）。➡1491
		●ウコン（鬱金）	７月26日，狩野重賢が写生（草木写生・秋上）。
寛文３	(1663)	●フユボタン（冬牡丹＝寒牡丹）	本年刊『［増続］山の井』に「冬牡丹」が初出。➡1683
寛文４	(1664)	●ヒギリ（唐桐＝緋桐）	６月29日，江戸で松平直矩が貰う（松平大和守日記）。当時珍重されたらしく，以後も「唐桐」が日記に多出。
		●コウオウソウ（紅黄草）・センジュギク（三葉丁子）・センニチコウ（千日紅）・タケシマユリ（武嶌百合）・ダンドク（だんどくせん）・ヒマワリ（日向葵）	本年稿の『花壇綱目』草稿本に含まれる（図は無い）。紅黄草はフレンチ・マリーゴールド／「三葉丁子」は『大和本草』(➡1709）の「三波丁子」と同じと思われるので，センジュギク（千寿菊）とした。いまは，アフリカン・マリーゴールドと呼ばれることが多い／タケシマユリは鬱陵島産。
寛文５	(1665)	●オグラギク（さんせうきく）	９月19日，狩野探幽が写生（草木花写生図巻）。
寛文６	(1666)	●アオギリ（梧桐）・オオケタデ・キササゲ（角楸）・サトウキビ（甘蔗）・シュロチク（棕櫚竹）・シュンギク（春菊，かうらいぎく）・ソテツ・トロロアオイ・ヒナゲシ（麗春）・ヒガンバナ（しびとばな）・ヒマワリ（丈菊）・フヨウ（芙蓉）・ヤブカンゾウ	本年刊の『訓蒙図彙』に図が出る／「荌，けたで・いぬたで」の図はオオケタデ（帰化植物）／ヒマワリは，16世紀末にヨーロッパに入り，中国では『群芳譜』(1621）に記載されている（植物文化史）。➡1664／トロロアオイ➡1492，本年末項

		●ロウバイ（南京梅）	１月22日，狩野常信が写生（常信写生図巻９）。➡1484
		●オウバイ（黄梅）	閏２月12日，狩野常信が写生（常信写生図巻１）➡1488
		●レンギョウ（れんきやう）	『松平大和守日記』３月21日条に「れんきやうの山吹色」と記されているのは，現在のレンギョウと思われる。古代の連翹は何を指すか不明。
		●レダマ	４月19日，狩野常信が写生（常信写生図巻４）。➡1645
		●トロロアオイ	９月６日，狩野常信が写生（常信写生図巻18）。➡1492
寛文８	（1668）	●トマト（唐なすび）	７月12日，狩野探幽が写生（草木花写生図巻）。➡1703
		●ヒギリ（緋桐，とうぎり＝唐桐）	７月30日，狩野常信が写生（常信写生図巻14）。➡1664
寛文10	（1670）	●ナニワイバラ？（はとばら）	３月29日，狩野常信が写生（常信写生図巻３）。「浪華」の名がつくが，中国原産。別名ハトヤバラ。
寛文11	（1671）	●ルコウソウ	８月30日，狩野常信が写生（常信写生図巻15）。
寛文12	（1672）	●チョウセンアサガオ（朝鮮朝顔）	８月15日，狩野常信が写生（常信写生図巻16）。「朝鮮朝顔」の呼称がすでに使われていた。➡1484
		●ヒレアザミ（飛廉，ヲニマユハキ＝鬼眉掃）	本年刊『本草綱目』和刻本（寛文本）の附録「本草綱目品目」に所収。いま日本各地に見られるが，古くに渡来して，野生化したのだろうという（本草図譜15解説）。
寛文年間（1661～72）		●クロフネツツジ（黒船つつじ）・ケラマツツジ（唐つつじ）・ブッソウゲ（仏桑花）	左記の種類が渡来（地錦抄附録）／「唐つつじ」の同定は『花木園芸』による／ブッソウゲは琉球から入り，冬に枯死したが，享保８年（1723）に再来（地錦抄附録）。
延宝１	（1673）	●ギンセンカ（銀盞花）	７月13日，狩野常信が写生（常信写生図巻13）。➡1492
延宝２	（1674）	●ミツマタ	２月13日，狩野常信が写生（常信写生図巻３）。➡1614
		●ジンチョウゲ（沈丁花）	３月30日，狩野常信が写生（常信写生図巻３）。➡1481
		●カボチャ・シュウメイギク・バイモ・ビヨウヤナギ・ホンキンセンカ・レンギョウ・ロウバイ	本年没した狩野探幽の『草木花写生図巻』には，既出件以外に左記の草木（写生年不明）の写生がある／おそらくバイモはもっとも古い図／ホンキンセンカ➡935／本図譜には芍薬と牡丹の品種が多数含まれ，流行を示す。一方，菊は改良が進んでいない頃の姿がわかる（植物文化史）。
延宝３	（1675）	●ホウセンカ	６月26日，狩野常信が写生（常信写生図巻10）。➡1454
		●タコノキ（かちやんノ木：誤認）	幕府の探検隊が無人島（小笠原諸島）から木と実を持ち帰る（磯野1997，通航一覧・付録12）。６月27日，狩野常信はその実を写生する（常信写生図巻10）。
		●ラッカセイ（落花生）	本年成の『遠碧軒記』に近来渡ると記す。
延宝４	（1676）	●シナガワハギ	６月18日，狩野常信が写生（常信写生図巻10）。
延宝５	（1677）	●ハクモクレン	『お湯殿の上の日記』２月25日条。
延宝８	（1680）	●チャラン（茶米蘭）	７月15日，狩野常信が写生（常信写生図巻12）。

		●ローズマリー（らうつまれいな，別名マンネンロウ，迷迭香）	８月４日，狩野常信が写生する（常信写生図巻２）。学名は Rosmarinus officinalis。
		●トキンイバラ（ごやをぎ）	本年刊の『合類節用集』に所収。➡1698
延宝年間（1673〜80）		●エニシダ（ゑにすだ）・タモトユリ・チョウセンカサユリ・トウツバキ（唐椿）	延宝年間に渡来（地錦抄附録）／タモトユリはトカラ列島中の口之島にだけ自生している。
		●ハゼノキ（リュウキュウハゼ）	延宝の頃，琉球より薩州に渡来。やがて，九州一帯に拡まる（農家益初編・後編）。実から蝋を採る。
天和２	（1682）	●サルスベリ（百日紅）	７月９日，狩野常信が写生（常信写生図巻13）。➡1645
天和３	（1683）	●フユボタン	『お湯殿の上の日記』本年〜貞享３年（1686）に，フユボタンらしい牡丹の記事が多出する。➡1663
天和年間（1681〜83）		●ヒメバショウ（美人蕉）	琉球より渡る（本朝世事談綺）。『大和本草』（1709刊）には「初薩州日州にアリ……近年畿内処々ニウフ」と記す。
		●ニッケイ（肉桂）	中国僧心越禅師が，持参した肉桂の種子を江戸の水戸藩邸に植える（植物渡来考）。薬用のほか，葉の斑入品が愛好された。➡1827
貞享１	（1684）	●ハナズオウ（花すはう）	和名「ハナズオウ」が初出（抛入花伝書：「蘇枋すはう」の項）。➡1446
天和・貞享年間（1681〜87）		●ヒイラギナンテン（柊南天）	この頃，渡来（地錦抄附録）。
元禄１	（1688）	●カンノンチク（観音竹）	元禄初年に渡来（本草図譜95解説）。「竹」とつくが，シュロチク（➡1631）と同じくヤシ科。
元禄８	（1695）	●ゴヤバラ（ごや荊）・テッポウユリ（琉球百合）・トウジュロ（唐棕櫚）・ビロウ	本年刊の『花壇地錦抄』に収録／ゴヤバラはノイバラの変種の一つ Rosa multiflora var. carnea で，一名ボサツイバラ，中国産／テッポウユリ➡1800／古代の「あぢまさ」はビロウらしいが，葉を取り寄せて用いただけらしいので，採録しなかった。本書は「薩州ニあり」と記す。
元禄９	（1696）	●コノテガシワ（そくはく＝側柏）	３月９日，狩野常信が写生（常信写生図巻２）。
元禄10	（1697）	●エニシダ（ゑにすた）	３月22日，狩野常信が写生（常信写生図巻３）。
元禄11	（1698）	●オシロイバナ（白粉花）・シジミバナ（こごめ花）・トキンイバラ（こやをき）	本年刊の『花譜』に名が出る。トキンイバラは，当時の関東ではボタンバナ，関西ではキクイバラとも呼んだと記されている。学名は Rubus illecebrosus f.tokin-ibara。
元禄12	（1699）	●オシロイバナ・コウオウソウ（紅黄草）・タケシマユリ（竹島百合）・タモトユリ（袂百合草）・ダンドク・チョウセンアサガオ・テッポウユリ（琉球百合草）・ネジアヤメ	本年刊の『草花絵前集』に図が出る。
元禄13	（1700）	●マツリカ（まりくわ＝茉莉花）	７月２日，狩野常信が写生（常信写生図巻13）。➡1500
元禄15	（1702）	●カザグルマ：紫八重	４月23日，狩野常信が写生（常信写生図巻４）。➡1631
元禄16	（1703）	●ハクチョウゲ（白丁花）	４月29日，狩野常信が写生（常信写生図巻４）。➡1491

		●トマト（おらんだなすび）	8月15日，狩野常信が枝に成った実を写生（常信写生図巻16）。現在の通称ミニトマト的な大きさ。➡1668
元禄年間（1688～1703）		●アマ（亜麻）	この頃渡来。亜麻仁油を採るために栽培（資源植物事典）。
宝永3	（1706）	●サンダンカ（三壇花）	7月27日，狩野常信が写生（常信写生図巻14）。➡1645
		●ブッソウゲ（仏相花）	7月30日，狩野常信が写生（常信写生図巻14）。➡1500
宝永6	（1709）	●イザヨイバラ（ラウザイバラ）・オオグルマ（木香）・コクチナシ・ザボン（ざんぼ）・サンシュユ（山茱萸）・ダンギク（ランギク）・ナンキンハゼ（烏臼木）・パセリ（オランダセリ）・ヒメザクロ（朝鮮石榴）・ホテイチク・「黄薔薇」	本年刊の『大和本草』に所収／イザヨイバラはサンショウバラ（一重，淡紅色）の変種で，八重咲き。多数の花弁の一部に欠けた個所が常にあるのを，十六夜の月になぞらえた命名／ザボンは食用のほか，葉の斑入品が鑑賞された➡1827／ナンキンハゼは「近年異邦ヨリ来ル」／ホテイチク（琉球竹）は「琉球ヨリ来レリ」／「黄薔薇」はマイカイ（玫瑰）の変種 Rosa odorata var.pseudoindica か（本草図譜27解説）。
宝永・正徳年間（1704～15）		●サンゴジュナ（珊瑚菜）・ショカツナ（諸葛菜）	左記の種類が渡来（地錦抄附録）。ハボタン（➡1717）は諸葛菜から生まれたらしい。
正徳3	（1713）	●キョウチクトウ（夾竹桃）・ナガキンカン	本年刊『和漢三才図会』に所収／キョウチクトウ➡1764／本書には，モクセイ類ではギンモクセイしか実見していないと記されている（➡1492，1719）／白い実をつけるナンテンが珍重されているとの記述もある。
正徳4	（1714）	●キクヂシャ（オランダチシャ）	本年刊の『菜譜』に名が出る。現在はエンダイブともいう。
正徳5	（1715）	●レモン（りまん）	本年刊の『大和本草諸品図』に図がある。
正徳年間（1711～15）		●シカクダケ（方竹）	琉球から薩摩に伝わる（本草綱目纂疏）。
享保2	（1717）	●ウチワサボテン？	本年刊『書言字考節用集』の「覇王樹さつぽうさちら」は，「如ㇾ掌」との注記からウチワサボテンらしい。
		●キンシバイ（金糸梅）・スルガラン（駿河蘭）・トケイソウ（時斗草）・ニチニチソウ（日々草）・ハボタン（葉牡丹）・ハラン（葉蘭）	本年成の『諸禽万益集』後書に出る名／『芳園巡逍録』もキンシバイを享保年間渡来とする／駿河蘭（➡1657）と時斗草＝時計草（➡1598，1642）はそれぞれの名の初出／ニチニチソウ➡1777／ハボタンは日本で改良されたともいう➡1735
享保4	（1719）	●エゾギク（薩摩菊）・キンモクセイ（丹桂）・ドウカンソウ（王不留行）	本年刊の『広益地錦抄』に所収／エゾギク，一名サツマギクは日本には無く，中国東北部産。
享保5	（1720）	●ビンロウ（檳榔）	蘭船が生木を持ち渡る（植物渡来考）。
享保6	（1721）	●トックリイチゴ（覆盆子）	清船が持ち渡る（鷹峯官園雑記）。
		●ハズ（巴豆）・ハナシャジン（沙参）	本年，長崎から小石川薬園に，左記の品を移す（御預御薬草木書付）。
		●チョウセンニンジン（朝鮮人参）	幕府の要請で，対馬藩が生根3本を献上。以後，享保13年までに計6回，生根計35本・果実60個を献じ，幕府は試行錯誤を重ねた末，享保末年には栽培技術を確立した（日本薬園史の研究，田代1999）。
享保10	（1725）	●ココヤシ（椰子樹）	幕府の命で蘭船が30個の実を持ち渡る。伊豆諸島や駿河などに植えたが，枯死（九淵遺珠）。

		●コガネヤナギ（黄芩）	幕府の薬材調査のため，朝鮮より取り寄せ，江戸城などに植える。開花し，実を結ぶ（田代1999，九淵遺珠）。
		●ニッケイ（肉桂）	清船が持ち渡った種子を駿府薬園に植え，のち小石川薬園にも分植（小石川植物園草木目録附記）。➡1681～83
		●コカキツバタ（小杜若）	この頃，対馬より来る。紫花と黄花の２品がある（地錦抄附録）。後者はキンカキツバタか。➡1748
享保11	（1726）	●サンザシ（山査子）	本年刊の『用薬須知』に所収。
享保12	（1727）	●マオウ（麻黄）	幕府の薬材調査のため，朝鮮より取り寄せる（田代1999）。
		●ホソバオケラ（蒼朮）	清船が持ち渡る（鷹峯官園雑記）。
		●トウカエデ（唐楓）	花戸伊藤伊兵衛政武，深山楓に接木したトウカエデを，幕府から下賜される。深山楓は命で本年春に伊兵衛が献上したもの。以後，トウカエデが拡まる（新編武蔵風土記稿）。
		●フウ（楓）	清船が持ち渡る（庚戌雑録：『植物渡来考』に引用）。
享保13	（1728）	●オオバナオケラ（白朮）	本年，清船が持ち渡る（鷹峯官園雑記）。
		●クロタネソウ	幕府が蘭館に注文して取り寄せる（本草学と洋学）。
享保16	（1731）	●ナンキンハゼ（烏臼木）	筑前国代官の献上品を駒場薬園に植える（駒場薬園有高帳）。
		●ゴシュユ（呉茱萸）	駿河薬園より駒場薬園に移植（駒場薬園有高帳）。
享保18	（1733）	●オランダセキチク（あんじやべる）・タマノカンザシ（玉笄）	本年刊の『地錦抄附録』に所収。「あんじやべる」は正保・万治年間（1644～60）に渡来したが絶え，近年また渡ると記す。
享保19	（1734）	●サンザシ（朝鮮種山櫨）	江戸城本丸より駒場薬園に移植（駒場薬園有高帳）。
享保20	（1735）	●ハボタン（葉牡丹）	本年刊の『草木弄葩抄』に名が出る。➡1717
享保年間（1716～35）		●シクンシ（使君子）・チョウセンゴミシ（北五味子）・トウロウバイ（檀香梅）・ニンジンボク（牡荊）・ビャクブ（百部）	享保年間に渡来（物類品隲）／トウロウバイは蝋梅の変種／ニンジンボクの名は葉が朝鮮人参に似るから／ビャクブはツルビャクブとタチビャクブの両者が渡来。
		●ハクセン（白鮮）	享保年間に渡来（異国草木会目録）。
		●ハルウコン（薑黄）	享保年間に渡来（資源植物事典，本草の植物）。
		●ムラサキナツフジ（醋甲サコウ：サクコウ）	琉球より渡来するが結実せず，拡まらずに終わる（新渡花葉図譜）。➡文化年間（1804～17），天保年間（1830～43）
元文１	（1736）	●モウソウチク（孟宗竹，江南竹）	琉球から薩摩に２株入る（薩摩博物学史）。➡1771
		●ゴヤバラ（菩薩茨）・サクラバラ・サンザシ・ダンギク・チョウセンアザミ（アーティチョーク）・ヒイラギナンテン	近衛家熙予楽院（本年没）著『花木真写』に図がある。
元文３	（1738）	●テンニンカ（天人花）	本年作成の『筑前国産物絵図帳』に図がある。フトモモ科に属し，赤紫色の美しい花が咲く。琉球・台湾産。
寛保年間（1741～43）		●ギョリュウ（檉柳，御柳）	清より渡来（本草綱目啓蒙）。
延享３	（1746）	●ハナカイドウ	本年没した松岡玄達の著作『本草一家言』にある「八重海棠」はハナカイドウかという（四季の花事典）。➡1444

寛延 1	(1748)	• ハリアサガオ	「寛延ノ始メ薩州ノ商人……，携キタル」（本草綱目啓蒙）。
		• キンカキツバタ	享保初年から本年頃まで描かれたらしい『東莠南畝讖』にスケッチされている。朝鮮産，小型で黄色い花が咲く。
宝暦 6	(1756)	• トウガラシ	熊本藩主細川重賢編『百卉侔状』に，宝暦 6 ～ 9 年に描いたトウガラシの51品種が含まれている。
宝暦 8	(1758)	• ゲッカコウ（月下香，阿蘭陀水仙，ナフトール，夜来香）	田村藍水が長崎で入手。蘭名ナクトトヲル。「夕方から深夜まで香る」旨の記述がある（田村公用日記，明和 3 年 7 月18日条）。➡1827
宝暦 9	(1759)	• キワタ（古貝）	幕府注文の種子 2 万余が江戸に到着，諸州に蒔かせたが，発芽したものも冬の寒さで枯れた（洋名入草木図）。
		• カンラン（橄欖）	漢種の種子が到来（物類品隲）。
		• ズイカク（蕤核）	江戸で播種，発芽し，湯島の薬草会に出品（物類品隲）。バラ科，中国産。
		• スイゼンジナ（水前寺菜）	本年渡来（異国草木会目録）。熊本水前寺で古くから栽培されていたのが名の由来。熱帯アジア原産，キク科。
宝暦10	(1760)	• モッコウバラ（白八重：木香花）	本年渡来（物類品隲）。➡1849
宝暦12	(1762)	• オランダワレモコウ	東都薬品会に「ピンプルネルレ」の名で出品。
宝暦13	(1763)	• キリンカク（覇王鞭，麒麟角）	本年刊の『物類品隲』に所収，「近世，琉球ヨリ来ル」と記す。トウダイグサ科，カナリア諸島原産。
明和 1	(1764)	• キョウチクトウ（夾竹桃）	「明和ノ初，琉球ヨリ来ル……重弁ノ者ハ安永中［1772～80］ニ来ル」（山海庶品）。➡1713
明和 2	(1765)	• オランダダンドク（黄花壇特）	田村藍水が献上し，駒場薬園に植える（駒場御薬園植物目録）。ダンドクだが，黄色い花なので，オランダダンドク Canna glauca（牧野新日本植物図鑑）か。
		• オオサンザシ・カクラン（鶴蘭）・サンシュユ・シジミバナ・ドウカンソウ・ハゼノキ・ハナジオウ（センリゴマ）・ハナモモ・ハリアサガオ	本年刊の『花彙』に，左記の図がある／カクランは琉球・中国・東南アジアに分布する／シジミバナ➡1709／ハナジオウ（花地黄），別名センリゴマ（千里胡麻）は中国原産らしい／ハリアサガオは学名 Calonyction muricatum。➡1748
明和 6	(1769)	• オオバナアザミ（漏盧）	清船が持ち渡る（救荒本草通解）。
明和 7	(1770)	• アスパラガス（きじかくし一種）	清船が持ち渡る（本草鏡）。同定は『上野年表』による。
		• ナンバンサイカチ（阿勃勒）	蘭船が種子を持ち渡り，田村藍水が蒔いて育てたが，冬の寒さで枯死（洋名入草木図）。
明和 8	(1771)	• フウチョウソウ（風蝶草）	本年，漢種が渡来（草樹纂説）。原記載は漢名「白花菜」。
		• ガジュマル（かつまある）	明和末年に渡来し，安永中頃に江戸に入ったが，何処でも寒気に痛んだので，幕臣の朝比奈が唐室（一種の温室）を考案し，以来寒さも凌げるにいたった（草木錦葉集 3 ）。
		• モウソウチク（孟宗竹）	明和末年には江戸にあったが，まだ珍しかった（塵塚談）。
安永 3	(1774)	• ホンニッケイ	本年か次年に渡来し，官園に植えたが，天明初年に寒さで枯れた（本草図譜80，同解説）。

安永４	(1775)	●アスパラガス・サラダナ・タマネギ・パセリ	本年来日したツュンベリーが，長崎に栽培されていると記す（江戸参府随行記：平凡社東洋文庫訳本による）。
安永５	(1776)	●オウゴンソウ・グンバイナズナ	本年帰国したツュンベリーの『日本植物誌』に所収。「オウゴンカ」「グンバイナズナ」の和名も添える。
安永６	(1777)	●ニチニチソウ（日々花）	「安永中，琉球ヨリ来ル……安永六年，広ク四方ニ伝フ……寛政中，変ジテ白花ノ者出ヅ」（山海庶品）。➡1717
安永７	(1778)	●ソテツナ	ハボタンの類で，蘭船が持ち渡る（本草図譜46解説）。
安永８	(1779)	●モウソウチク（孟宗竹）	江戸品川の薩摩屋敷に薩摩から移植（武江年表）。その前に江戸に入っていたが，まだ珍しかった。➡1771
安永９	(1780)	●カマヤマショウブ（釜山菖蒲）	本年頃に記された『聚芳図説』に名が初出。アヤメの一変種で，別名リュウキュウアヤメ。➡1844
天明４	(1784)	●ホウサイラン（報歳蘭）	琉球より薩摩に渡来（中山草木）。
天明５	(1785)	●ワンピ（黄枇）	琉球より薩摩に渡来（中山草木）。ワンピはミカン科で，中国南部原産。
天明６	(1786)	●フウチョウソウ（風蝶草）	石田幽汀（本年没）作の三好知恩寺の屏風に描かれている（植物文化史）。➡1771
		●グンバイナズナ	本年刊の辞書『雑字類編』に所収。ヨーロッパ原産。
寛政１	(1789)	●トクサラン（トウチクラン＝唐竹蘭）	「寛政のはじめ，予［著者水野忠暁］が方にて布［斑入］出る」（草木錦葉集６）。「ラン」と付くが，ユリ科。
寛政２	(1790)	●ハズ（巴豆）	琉球人が福建省で生木を入手，薩摩にもたらして，佐多薬園に植える（農経講義，成形図説43）。➡1721，1827
寛政４	(1792)	●カコソウ（夏枯草）	清船が実を持ち渡る（駒場薬園有高帳）。夏枯草は中国原産で，日本にも産するウツボグサはその亜種。
寛政６	(1794)	●ハブソウ（決明子，波夫草）	本年成の『農経講義』に，琉球より渡り，諸方に栽培されていると記す。
寛政11	(1799)	●トウツルモドキ（省藤）	水谷豊文が摂州池田より京都に持ち来る（本草図譜32）。
寛政12	(1800)	●テッポウユリ	本年成の『本草綱目纂疏』に「琉球百合，一名鉄砲百合（関東）」と「テッポウユリ」の名が初出。➡1695
		●リュウガン（竜眼）	薩摩山川薬園のリュウガン（➡1659）はみな育っていたが，寛政末年春の厳寒に枯れて絶える（農経講義）。
寛政年間（1789～1800）		●マメキンカン（金豆）	「寛政年中渡ル」（本草要正）。
享和２	(1802)	●ソケイ（素馨）	琉球より薩摩に渡る（品物考証）。
享和年間（1801～03）		●モウソウチク（孟宗竹）	薩摩より近衛家に献上。うち２本を等持院村に植え，それから京都各地に拡がる（重修本草綱目啓蒙増補抄録）。➡1736，1771，1779
文化１	(1804)	●ウケユリ（承百合）	本年刊『成形図説』に図説。奄美大島とその属島である請島（うけじま）などにだけ自生する。
文化２	(1805)	●モダマ	紀伊の尾鷲に，種子や莢が多数漂着する（桃洞遺筆４）。
		●イザヨイバラ（イザヨイイバラ）・クマタケラン（高良薑）・センナリホオズキ・ホザキノイカリソウ（唐種淫羊藿）・ワニグチモダマ	本年刊の『本草綱目啓蒙』に名が出る／イザヨイバラはこの和名の初出か／クマタケランは「先年，福州ヨリ種ヲ伝フル」／ホザキノイカリソウは「花戸ニ唐種ノ淫羊藿ト呼者アリ」。

文化３	(1806)	●セイヨウマツムシソウ（スカヒヨサ）	蘭船が持ち込む（遠西舶上画譜１）。
文化６	(1809)	●イセハナビ・オランダワレモコウ（ヒンプルネルレ）・コウヨウザン（広葉杉）・サクララン・ニュウメンラン（入面蘭）・ノボタン（野牡丹）	本年刊の『物品識名』に名が載る／イセハナビは中国原産➡1853／オランダワレモコウは「ピンプルネルラ」などと呼ばれた／漢名の「杉」は本来コウヨウザンを指す。スギは中国に無く，日本特産／「入面蘭」は琉球産，イリモテランともいう／野牡丹は琉球名。
文化９	(1812)	●フトモモ（蒲桃）	設楽（しだら）妍芳が小株を入手（蒲桃図説）。➡1824
文化11	(1814)	●センニンコク（仙人穀，別名ヒモゲイトウ）	琉球より渡来。文化13年頃より各地に普及（橘黄閑記，草木育種）。
		●アンペラ・オランダワレモコウ（ピンフルネル）・ソケイ・ダンチョウゲ（段丁花）	江戸の縁日や薬園でこの年に見た草木の記録『名物脞録』に記載されている（図は無い）。ピンフルネル➡1809／ソケイ➡1802／ダンチョウゲ➡1824
文化12	(1815)	●キズイセン（ヒヤシンド，黄水仙）	前年長崎に入港した英船が持ち渡ったが，その球根を役夫の清蔵が秘かに持ち出して拡まった（鍾奇遺筆１）。
文化13	(1816)	●ムラサキオモト	琉球より薩摩へ渡来（竹園草木誌，異国草木会目録）。
文化14	(1817)	●ジンコウ（沈香）	清商が生木を長崎奉行に献上（成形図説42，橘黄閑記12）。
文化年間（1804～17）		●シロツヅ	岩崎灌園が「下種せしに二三の内一つ生ず」と記す（本草図譜84）。琉球を含む熱帯に分布する。
		●ハシカンボク	薩州より江戸に来る（芳園巡逍録）。
		●ムラサキナツフジ（醋甲）	「琉球産，文化中舶来」（異国草木会目録）。➡1716～35
文政１	(1818)	●オランダハッカ・カミルレ・サルビア・ルリハコベ	幕府が蘭館に注文，翌年～文政８年に渡来したなかに左記の種類がある（洋舶盆種移殖の記，本草学と洋学）。
文政２	(1819)	●種無しブドウ（瑣々葡萄）	丹波亀山藩城代松平芝陽が，松平定信より拝領する（瑣々葡萄：物産叢書４に所収）。
文政３	(1820)	●ハルウコン（薑黄）	山本読書室で初めて開花（水谷記聞６）。➡1716～35
文政５	(1822)	●ホンキンセンカ	２月，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・春１）。➡935
		●ハナカイドウ	３月５日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・春１）。
		●ジオウ（地黄）	４月１日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏１）。
		●センニンコク（ヒモゲイトウ）	６月，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏１）。➡1814
文政６	(1823)	●センナリホオズキ	６月，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏２）。➡1805
		●サルビア	山本読書室物産会に出品（同目録）。➡1818
		●アダン（アナナス：誤称）	琉球より到来（遠西舶上画譜５）。
文政７	(1824)	●キソケイ？（黄花素馨）	薩摩船が持ち込む（芳園巡逍録）。
		●フトモモ（蒲桃）	設楽妍芳が自宅に植えた樹が，12年目に初めて開花・結実した（蒲桃図説）。➡1812
		●ダンチョウゲ	５月１日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏２）。ハクチョウゲの一品種。➡1814
文政８	(1825)	●ギョクチンラン（玉沈蘭）・ソシンラン（素心蘭）	５月21日，「山本読書室物産会」に出品（同目録）。

		●コリヤナギ・リュウキュウオウバイ・リュウキュウハンゲ（琉球半夏）	本年刊行の『物品識名拾遺』にそれぞれの現和名が所収されている／コリヤナギの表記は初出か➡1635／リュウキュウハンゲ➡1829
文政９	（1826）	●ムレスズメ（金雀花）	３月10日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・春３）。
		●ギョリュウ（御柳）	４月14日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏３）。
文政10	（1827）	●ムラサキオモト	４月16日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏４）。
		●ゲッカコウ（月下香，ヲランダズイセン）	閏６月29日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏４）。➡1758
		●ハズ（巴豆）	薩摩の佐多薬園で初めて結実。➡1790
		●キリンカク・クネンボ・コクチナシ・サボテン・ザボン・トウジュロ（唐棕櫚）・トケイソウ・ニンジンボク・ホウオウチク（鳳凰竹）・ラカンマキ	本年刊の『草木奇品家雅見』に，左記種類の斑入などの変異品を所収。
文政11	（1828）	●モクセイソウ（木犀草，ニオイレセダ，レセダ - オドラタ）	蘭船が持ち渡る。学名は Reseda odorata（乙未本草会物品目録）。
		●キンリョウヘン（金稜辺，ランの一種）	「近来渡りたるよし。文政十一，予［著者水野忠暁］は初て見る」（草木錦葉集６）。
		●コカキツバタ	４月15日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏５）。
		●ソケイ	11月16日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・冬）。
		●ゴモジュ	11月21日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・冬）。奄美大島・西表島などの固有種。巣鴨の花戸で写生。
文政12	（1829）	●リュウキュウハンゲ（琉球半夏）	４月14日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏５）。
		●イザヨイバラ	４月16日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・夏５）。
		●トキンイバラ	４月24日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・夏５）。
		●タマノカンザシ（玉簪）	５月24日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・夏５）。
		●カクラン（鶴蘭）・カラン（花蘭）・シコウラン・カンボウラン（寒鳳蘭）・ギョクチンラン（玉沈蘭）・ココンリン（古金輪）・ソシンラン（素心蘭）・ハクラン（白蘭）・ヤキバラン（焼刃蘭，金輪際）・カンツワブキ・クワズイモ・コウヨウザン（広葉杉）・サクララン・シマミサオノキ・ニッケイ・ハナヅルソウ・バンジロウ（グアバ）・ヒモスギラン・マルバニッケイ	本年刊『草木錦葉集』は斑入・矮化などの変異品や，外来の奇品の図説で，左記渡来種も所収されている／カクランは琉球・中国・東南アジアに分布する➡1765／カランは一名リュウキュウエビネ Calanthe masuca／シコウランは奄美・琉球・台湾産／カンボウランからヤキバランまでは Cymbidium 属の蘭／ギョクチンラン，ソシンラン➡1825／カンツワブキは屋久島・種子島産／コウヨウザン➡1809／サクララン はガガイモ科／ニッケイ➡1681～83／ハナヅルソウは南アフリカ産／ヒモスギランはシダ類。
文政年間（1818～29）		●ハシカンボク	文政初年に大坂に，ついで江戸に入り，同11年には斑入品も現われた（草木錦葉集１）。➡文化年間（1804～17）。
		●トウサイカチ	長崎より江戸に来る（本草図譜83）。
		●オオバナソケイ（素馨）	琉球種，江戸に来る（本草図譜11）。
天保１	（1830）	●ガジュツ（莪茂）	岩崎灌園が幕府に献上する（岩崎灌園由緒書）。ガジュツはショウガ科の植物。蓬莪茂ともいう。➡1632

		●カカヤンバラ（現ヤエヤマノイバラ）	ルソン島カカヤンに漂着した八丈島の船長儀平が種子を持ち帰る（草木奇花写真，草木図説木部５・解説）。
		●キンゴジカ（金午時花）	天保初年，江戸巣鴨花戸斎田弥三郎が入手（珍卉図説）。
天保３	（1832）	●マルバアサガオ	７月18日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・秋４）。
		●トウアズキ（相思子）	本年種子が持ち渡られ，栽培に成功（珍卉図説）。
天保４	（1833）	●ホザキノイカリソウ（淫羊藿，漢種白花）	３月28日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・春４）。➡1805
		●ダンギク	９月２日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・秋４）。「文政辛巳［４年］再琉舶来」と注記。➡1709
天保６	（1835）	●マルバタバコ（黄花小烟草）	６月10日，山本読書室物産会に出品（同目録）。
		●バラモンジン（婆羅門参）	４月28日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏６）。
		●ワニグチモダマ（鰐口藻玉）	大坂で種子を購入し，それを蒔いたところ発芽。ただし，開花にいたらず（珍卉図説）。➡1805
天保８	（1837）	●サクララン	本年刊の『草木育種後編』に，「琉球より来る」として，サクララランの栽培を詳しく述べる。➡1809，1829
天保９	（1838）	●キンゴウカン（金合歓）	摂津池田の花戸下村惣七郎が，土岐備前侯より拝受（鍾奇遺筆５）。
天保10	（1839）	●アスパラガス（アスヘルチイ）	６月22日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏７）。
		●オランダハッカ	この頃，蘭船が持ち渡り，各地に拡まる（重修本草綱目啓蒙・増補記事）。➡1818
		●キマメ（木豆）	本年刊の『百品考』初編に，「琉球より渡る」旨を記す。
天保12	（1841）	●スイセンアヤメ	本年渡来（新渡花葉図譜）。
		●ダリア（天竺牡丹，纏枝牡丹，ラノンケル）	江戸花戸内山長太郎が，濃紅花を大坂から買入れるが，江戸で流行するまで数年を要した（百花培養集，➡1842，1846）／天保12年は蘭船が入港していないので，11年か，それ以前の持ち込みと思われる。次項のオジギソウも同じ。
天保13	（1842）	●オジギソウ（コロイヂイル・ルメイニイト）	長崎から京都・江戸へ到来（屈佚草記，新渡花葉図譜）。蘭船による持ち込みは天保11年か，それ以前。➡前項
		●オランダセンニチ（セリヤーハン，アルマモクト）	尾張の伊藤圭介が，長崎にいた弟子松崎寛一から種子を贈られ，栽培する（雑纂249）。
		●ダリア（赤・黄・白の一重と赤八重）・トウワタ（唐綿）・ハナカタバミ（ヲキサリス）・バンウコン（蕃鬱金，コンチョロ）	左記の品を蘭船が持ち込む（遠西舶上画譜１）／ダリアは　２度目の渡来か。➡前年，1846／トウワタは，『本草図譜』92も天保13～14年渡来とする／ハナカタバミは「オキザリス・ローザ」と呼ばれることが多かった。
		●トクサラン（唐竹蘭）	12月15日，山本渓愚が写生（本草写生図譜１）。➡1789
天保14	（1843）	●オランダカイウ（和蘭海芋，蛮海芋，現通称カラー）	蘭船持ち渡りの薬草栽培箱の土に混入していた球根を，長崎薬種目利野田青葭が植えて，本品を得た（拾品考）。
		●カミルレ	蘭船が将来（竹園草木図譜２）。➡1818

天保年間（1830〜43）		● オランダフウロ・キンサンジコ（金山慈姑）・ジャガタラスイセン・シロノセンダングサ（ドルレケルフル）・トウキンセン（唐金盞）	左記の種類が渡来する（遠西舶上画譜１）／現在のキンセンカは，トウキンセン。南欧原産である。➡935，1849／ジャガタラスイセンとキンサンジコ（金山慈姑）は琉球より入る。アマリリスは，これらを原種として作成した品種である。
		● オウコチョウ（金鳳）・ハナビシソウ	この頃に渡来（遠西舶上画譜５・６）。オウコチョウ（黄胡蝶）は，ジャケツイバラやシロツブと同属のマメ科植物。
		● ムラサキナツフジ（醋甲）	薩摩より渡る（新渡花葉図譜）。➡1716〜35，1804〜17
弘化１	（1844）	● キズイセン	２月18日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・春２）。➡1815
		● タマリンド	夏，高井氏が種子を蒔き，育てる（本草写生図譜２）。
		● アカネスイセン（ボスメン一名ピツキ）	本年渡来（異国草木会目録）。Eleutherine bulbosa，南米産（本草写生図譜１のアカネスイセン解説）
		● オウゴンソウ・オオサンザシ（朝鮮さんざし）・オランダイチゴ・カマヤマショウブ・キンゴウカン・クロツグ・コンロンカ（崑崙花）・スイフヨウ（酔芙蓉）・テンノウメ（天ノ梅）・トウセンダン・ナンバンカンゾウ（南蛮萱草）・ノボタン・ハリナスビ・ボンテンカ（梵天花）	本年配布を終わった岩崎灌園著『本草図譜』に左記の品を所収／オランダイチゴは「近年来る」／カマヤマショウブ➡1780／キンゴウカン➡1838／酔芙蓉は，花が開く朝には白く，昼に淡紅，晩に紅色と変わるのが名の由来だが，その変化を写生。なお，この翌年に京都で開かれた異国草木会にもスイフヨウが出品されている（同目録）／テンノウメはバラ科，琉球などに産する／トウセンダンは「長崎に大樹あり」と記すので，渡来はかなり前であろう。
弘化２	（1845）	● パイナップル（鳳梨）	蘭船が生木を持ち渡る（拾品考）。蘭名アナナスボーム。
		● サフランモドキ（蛮産山慈姑）	前項パイナップルの栽培土に混入していた球根を薬種目利野田青葭が育てた（拾品考）。当時はサフランと誤認。
		● ノウゼンハレン（赤花）	蘭船が持ち渡り（鍾奇遺筆５），翌年江戸に入って流行する（百花培養集）。
弘化３	（1846）	● オジギソウ（ネムリソウ）	６月27日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・夏７）。
		● ダリア	黄花一重咲・紅紫八重咲・紅絞り八弁の３品が，大坂より江戸に入り，嘉永元年（1848）までに黄花八重咲・紅花一重咲が江戸で生じた（百花培養集）。➡1841，1842
		● ジャガタラスイセン（ジャガタラ百合）	琉球より３根渡来（百花培養集）。➡1830〜43
		● シロツメクサ（クローバー）	オランダから幕府への献上品に詰物として使われていた枯れ草から，種子を得て育てた。それが現和名「ツメクサ＝詰草」の由来である（竹園草木図譜21）。
		● オオバノセンナ？（大葉センナ）	蘭船が舶載する（拾品考）。
弘化４	（1847）	● スイセンアヤメ	４月４日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・夏７）。
		● オランダワレモコウ	４月，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏７）。➡1809

		●ハルシャギク（ダリヤス）	５月16日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・夏７）。俗称が「ダリヤス」で，ダリアと紛らわしい／天保14年（1843）渡来という（白井光太郎著作集３）が出典不明。
		●ツキミソウ	本年渡来。京都で待宵草，花戸では宵待草・夕化粧と称したという（遠西舶上画譜４，雑纂108）。
弘化年間（1844〜47）		●ギョボク（魚木）	琉球より渡る（遠西舶上画譜５）。材が軽く柔らかいので，擬似餌の魚形を作るのが語源である。
		●レイシ	琉球より渡来，安政元年（1854）に江戸で初めて千駄木花戸で開花，結実した（遠西舶上画譜５）。➡1659
		●「アマヲマモルリスブル」（ショウジョウカの一雑種）	弘化年間渡来（新渡花葉図譜）。イチビ（Abutilon）属ショウジョウカの雑種という（草木図説木部２解説）。
		●フジゲイトウ（アマラント一種）	弘化年間渡来（遠西舶上画譜４）。別名スギモトケイトウ，ホソアオケイトウ。アマラントは属名のAmaranthus。
		●キンケイギク	弘化年間渡来（雑纂33）。
嘉永１	（1848）	●チョウジ（丁香）・ビンロウ（檳榔）・ニッケイ・ヤシ	蘭船が生木を持ち渡る（拾品考）。
		●ナンバンアカアズキ（海紅豆）	蘭船が持ち渡る（拾品考）。
		●タケシマユリ	５月２日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏８）。
		●オランダフウロ	６月25日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・夏８）。
		●ノウゼンハレン（黄花）	江戸花戸内山長太郎が，黄花を売り出す（百花培養集）。
		●キバナハギ	嘉永初年，蘭船が持ち渡る（沙苑蒺藜考：雑纂172所収）。
嘉永２	（1849）	●トウキンセン（唐金盞）	３月22日，毛利梅園が写生（梅園草木花譜・冬）。
		●ノウゼンハレン（赤花）	６月10日，毛利梅園が写生する（梅園草木花譜・夏８）。
		●イチゲハマベズイセン（蘆薈：誤称）・オオキンバイザサ（仙茅）・サフランモドキ（サフラン：誤認）	長崎奉行井戸対馬守が幕臣馬場大助に贈る（遠西舶上画譜４・５：同定は『本草写生図譜』の北村四郎解説による）／サフランモドキ➡1845
		●ハリナスビ（苦茄）	蘭船が種子を持ち渡る（百品考３上）。➡1844，1851
		●リュウガン（竜眼）	花戸森田六三郎が11年前に薩摩侯から下賜された実を育て，江戸で初めて結実させる（竹園草木誌，鍾奇遺筆６）。
		●バンガジュツ・モッコウバラ（黄花）	本年渡来（遠西舶上画譜４・５）／バンガジュツ（蕃莪朮）は Kempferia rotunnda／モッコウバラ➡1760
		●ベニスジアマリリス	本年，渡辺又日菴宅で開花（新渡花葉図譜）。
嘉永３	（1850）	●マルバルコウ（ルコウアサガオ）	本年渡来（奇品写生）。
		●シロチョウマメモドキ（ドリコス）・マメアサガオ	本年渡来（遠西舶上画譜４・５，新渡花葉図譜）。シロチョウマメモドキはチョウマメに近縁で，スマトラ産。
嘉永４	（1851）	●ハリナスビ（苦茄）	山本渓愚が写生（本草写生図譜１）。➡1844，1849
		●カエンソウ（火焔草）・キダチトウガラシ	蘭船が持ち渡る（遠西舶上画譜３）。

		●キダチチョウセンアサガオ・チョウマメ（キリトリア）・ツルナシナタマメ・ベゴニア・マツヨイグサ・マンテマ・ロゼルソウ	本年渡来（竹園草木誌，竹園草木図譜22，植物渡来考）／ロゼルソウはHibiscus属の草で，熱帯アフリカの原産だが，熱帯に広く栽培され，食用・繊維用に供される。
		●トロロアオイモドキ？（アベルモスユス）・ナンバンタヌキマメ（コロツタルラリア）	蘭船が種子を持ち渡る（遠西舶上画譜４）。
		●シュクシャ（宿砂，ガランガ）	本年渡来（新渡花葉図譜）。➡1853
		●ハサボテン（ハボテン）	本年か次年に渡来（新渡花葉図譜）。
嘉永５	（1852）	●ギンケマル（ギンデマリ：サボテン）・キンゴウカン（黄花合歓）	本年渡来（新渡花葉図譜）。キンゴウカン➡1838
		●ナンバンクサフジ（エゴイテンパータツリ）・モクワンジュ	６月，ともに開花（新渡花葉図譜）／『草木図説』14はナンバンクサフジの俗称をエゴイランタータツリとする。
		●マイハギ（舞萩，ゲイランス）	本年渡来。舞草ともいう（遠西舶上画譜３）。
		●ハクサイ（白菜，唐菘）	唐船が持ち渡る。「葉ヲ巻テ生ス」の説明がある（遠西舶上画譜３）。
嘉永６	（1853）	●サンゴバナ（ユスデシヤカンネヤ）	長崎通詞北村元助が，馬場大助に贈る（遠西舶上画譜３）。当時の学名 Justicia carnea から，「ユスデシヤ・カンネヤ」「イユスチシア」などと呼ばれた。
		●イセハナビ・キバナハギ・パイナップル（鳳梨）	本年刊『百品考』三編に記事がある。イセハナビ➡1809／キバナハギ➡1848／パイナップル➡1845
		●ギンゴウカン（白花合歓）	蘭船が持ち渡る（新渡花葉図譜）。
		●ニクイロシュクシャ（ガランガ，良薑）	本年渡来した（新渡花葉図譜）。➡1851
		●キアイ（木藍，レプタスタシア）	本年渡来（遠西舶上画譜３）。
嘉永年間（1848～53）		●アカバナレンゲ（ケレイネ-ドンドルバールト）	嘉永年間に渡来した（草木図説８）。学名は Echeveria lurida（本草写生図譜２の「ケレイネドンドロ」解説）。
		●リュウガン	江戸で初めて千駄木花戸で開花・結実（遠西舶上画譜５）。
		●オオアザミ	「嘉永年間，初テ得之」（草木図説15）。地中海沿岸原産。
安政１	（1854）	●アザミヤグルマ・オクラ・ヨルガオ	ペリー艦隊が種子を持ち渡る（遠西舶上画譜３）。
		●オクラ	秋，駿府奉行貴志忠美が江戸より種子を贈られ，翌２年に蒔いたところ，開花し，細長い実が生じた（本草写生）。
安政２	（1855）	●キアイ（レフダスタシア）・チョウマメ（キリトリヤ）・ナンバンタヌキマメ（スズナリヤ）	５月21日，山本読書室物産会に出品（同目録）。
		●イモカタバミ？（ヒメヲキザーリス）・オオセンナリ・シロバナソシンカ（コンタラエルハ）	本年渡来した（遠西舶上画譜２・５）。
安政３	（1856）	●カンナ（黄花）・キンギョソウ	本年渡来（遠西舶上画譜２）。
安政４	（1857）	●サボテン７～８品：「ユレイユイネテイ，エテカツテエフス，ライフルエメシキ-メコアカンナ，アカラシネラ」など	本年渡来，いずれも異形（重修本草綱目啓蒙増補抄録16）。
		●グラジオラス（ナガルポーム）	本年渡来（新渡花葉図譜）。
安政５	（1858）	●クリナムの一種（曇花）	本年渡来（遠西舶上画譜４）。白花，花弁中央に赤筋。

		● フクシア	本年渡来（遠西舶上画譜３）。
		● トキワギョリュウ（テンネボーム，カシユアリナ）	種子が長崎に到来（白井年表）。トキワギョリュウ（常磐御柳）は Casuarina equisetifolia，オーストラリア産。
		● ハナキリン（ユーホルヒウム）	本年渡来し，摂津池田より尾張に来る（新渡花葉図譜）。『遠西舶上画譜』３も渡来は本年とする。原記載名は属名 Euphorbia に由来する。
安政６	（1859）	● ハウチワマメ（リュプニュス）	７月，山本渓愚が写生（本草写生図譜２）。
		● アロエ（カイマンゴロウ）・リュウゼツラン（龍舌蘭）	本年渡来（遠西舶上画譜３）。
		● オロチ（大蛇，カシノカントリス）・タンケマル（短毛丸，トイフルスメルキ）・サクラキリン（ダーラケンフルートス：以上サボテン類）・バンマツリ（蛮茉莉，セイテラボーム）	本年３月成の『天保度後蛮舶来草木銘書』には，左記の名が挙がっている。
安政年間（1854〜59）		● イトラン（糸蘭，ユツコウ - フラチデ）	安政年間に長崎から江戸に入り，文久３年（1863）には開花した（物産宝庫）。
		● ルリヤナギ	長崎の薬目利野田青葭が飯沼慾斎に種子を贈る。近年の渡来という（草木図説木部２）。
		● カセイマル（花盛丸）	左のサボテンが舶来（草木図説木部４）。舶来年代は不明だが，同書にはサボテン類のホウケン（宝剣）やコクリュウ（黒竜）も描かれており，これらも持ち込まれていた。
万延１	（1860）	● アカツメクサ・アザミゲシ・ウスベニカノコソウ・カッコウアザミ・キキョウナデシコ・キャベツ・ コムギセンノウ・サトウダイコン・ジギタリス・シュッコンアマ・スイートピー・タマネギ・ナツザキフクジュソウ・ネモフィラ・ハイナス・パンジー・ヒャクニチソウ・ペチュニア・ベニニガナ・ベニバナツメクサ・ホソバノサンジソウ・マツバボタン・マヨラーナ・ムギワラギク・メキャベツ・ヤグルマギク・ヤハズカズラ・ラズベリー・ラベンダー・ワタ（リクチメン）／バーベナ・ファセリア・ベニバナインゲン	９月，遣米使節が種子を持ち帰ったなかに左記の新来品がある（遠藤2000〜01：ただし，最後の３品は遠西舶上画譜２・６による）／タマネギ➡1775／マヨラーナはハナハッカ属の Origanum majorana ／左記は持ち帰り品の一部にすぎない（詳細➡上記報文）。また，普及は明治時代以降の場合が多い。
		● アカバナレンゲ（ケレイネ - ドンドルハアル）	本年渡来（遠西舶上画譜４）。➡嘉永年間（1848〜53）
		● キチョウジ類（黄丁字，セレイテイヤ）	江戸より尾張に入る（新渡花葉図譜）。
文久１	（1861）	● キンケマル（キンデマリ）・ナンテンソケイ（南天素馨）	本年渡来（新渡花葉図譜）。キンケマル（金毛丸）はサボテン類。

		●シラボシベゴニア（エーケンベルラア）	尾張に来る（新渡花葉図譜）。葉の表側に白星が散在し，裏側が紅色のベゴニア。
		●キバナルピナス（サラタラリヤ）	アメリカより渡来（雑纂33）。
		●キクイモ	本年あるいは次年，英公使オールコックが英国仮公使館の高輪東禅寺に植える（雑纂211）。
文久２	（1862）	●カリフラワー・レタス	９月，米公使が64品の農作物種子を献上。そのなかに左記の種類がある（原1943）。
		●アメリカチョウセンアサガオ・アリッサム・アルファルファ・イロマツヨイ・キリカズラ・クロタネソウ・コーカサスマツムシソウ・コキリカズラ・コスモス・サクラマンテマ・サルメンバナ・サンシキヒルガオ・ナツシロギク・ハカマオニゲシ・ハクチョウソウ・ハナアオイ・ハリエニシダ・ヒエンソウ・ヒメキンギョソウ・ヒロハノハナカンザシ・フウリンソウ・フランスギク・ベニカノコソウ・ベニバナアマ・ヘビウリ・マガリバナ・ムシトリナデシコ・ムレゴチョウ・モモイロタンポポ・ユウギリソウ・ルピナス・ルリハッカ・ワスレナグサ	12月，遣欧使節が250種を超える種子類を持ち帰る（遠藤 2000〜01：キリカズラは『雑纂』21，ヒロハノハナカンザシは同241による）。そのうちの代表的な新来・再来品を 左欄に挙げた。ただし，前々年の遣米使節持ち帰り品と重複するものは省いている／クロタネソウは古く享保13年 （1728）に蘭船で種子が持ち込まれたとの記録があるが，それ以降の園芸書には記事が載らないので，ほどなく絶えたらしい。したがって，本年は再来／ムシトリナデシコは「虫取り」の名はつくが，食虫植物ではない／遣米使節の持ち帰り品（➡1860）と同じく，左記は持ち帰り品の一部のみである。また，大半は明治時代以降に普及。
		●ヨウシュチョウセンアサガオ（イガホウツキ＝イガホオズキ）	本年渡来（新渡花葉図譜）。
		●サンジソウ（山字草，ホスホラカウテルバランカ）	江戸より尾張に入る（新渡花葉図譜）。本種やホソバノサンジソウの花弁が「山」字型に三裂するのが「山字草」の名の由来か。
文久３	（1863）	●チューリップ	フランスより球根が渡る（雑纂49）。
		●アメリカナデシコ（エイケンラシヤ，ビジョナデシコ）・カーネーション・ツタバキリカズラ（蔦葉桐葛，バアークラヤナ）・モミジアオイ（紅葉葵）	本年渡来（新渡花葉図譜）。カーネーション➡正保・万治年間（1644〜60）／「バアークラヤナ」はツタバキリカズラの現種小名 barclaiana に由来する名。
		●オガサワラビロウ？・シマニシキソウ・タコノキ，バナナ	小笠原諸島より持ち帰る（遠西舶上画譜５・６／バナナ➡雑纂24）。タコノキ➡1675
		●クリカボチャ・米国種ヒマ	初めて渡来（資源植物事典）。天正〜慶長の頃に伝わったカボチャはニホンカボチャとされる。
		●ハナカンザシ	伊藤圭介が種子を蒔く（雑纂33）。
		●サフラン	フランスより球根が渡る（雑纂191）。
文久年間（1861〜63）		●オリーブ	相模国横須賀で試験栽培するが，失敗（資源植物事典）。
		●セイヨウリンゴ	この頃に渡来，江戸に植える（本草の植物）。
元治１	（1864）	●キンケイギク・フウリンソウ	江戸より尾張に来る（新渡花葉図譜）。➡1862
		●テンジクアオイ（天竺葵，ゼラニウム）・モンテンジクアオイ（紋天竺葵，ゼラニウムの類）	摂津池田より尾張に入る（新渡花葉図譜）。

慶応１	（1865）	●モクキリン（木キリン）	摂津池田より尾張に来る（新渡花葉図譜）。サボテン類。
		●ベニバナサルビア	渡辺又日菴が花戸から入手（新渡花葉図譜）。
慶応２	（1866）	●イセハナビ・キクバテンジクアオイ（菊葉天竺葵，ゼラニウム類）・サンユウカ（三友花）・ハクチョウソウ・パンジー	近年渡来した左の種類が尾張に来る（新渡花葉図譜）／イセハナビは19世紀初頭までに持ち込まれていた（➡1809）が，再渡来したようである。「伊勢」を冠するが，中国産。
慶応３	（1867）	●ヒアシンス（フシヤシントウ）	本年渡来，淡紫・橙色の２品（新渡花葉図譜）。➡次年
		●イボサボテン・キンチャクサボテン・ヒメサボテン・ヒモサボテン・ニオイイリス	パリ万国博覧会に出席していた田中芳男が持ち帰る（物産宝庫１・３）。
		●オニゲシ（通称オリエンタル・ポピー）	慶応年間末，洋船が持ち渡る（雑纂156）。
明治１	（1868）	●ツバメズイセン（燕水仙）	尾張に入る（新渡花葉図譜）。
		●クリアンサス-プニケウス・チャボツキミソウ類・テンニンギク・ドデカテオン・ハツユキソウ・ビオラ-ルテア・ヒナギク・マツバナデシコ・マユハケオモト・ローレア-ベスペルチリオニス	明治改元の２日後に没した馬場大助の『遠西舶上画譜』には，既出例以外に渡来年不明の左記諸品が描かれている／クリアンサス-プニケウス（Clianthus puniceus）はマメ科で，花は旗弁と竜骨弁が反対側に長く延びた特異な形を示す／ドデカテオンはシクラメンの近縁種／ローレア-ベスペルチリオニス（Lourea vespertilionis）は，竹とんぼ型の紫がかった葉をもつマメ科の蔓草。一名，飛行機草。

文献

１　『国書総目録』や日本史事典類，拙著『日本博物誌年表』などに古和書の所蔵館，影印本・翻刻本の出版社を記してある文献は，多出する場合や，略号を用いた例などを除き，原則として省略した。

２　➡の後には正式な書名・報文名，⇨の後には関連文献や所収資料などを記す。

異国草木会目録，高井正芳・賀島近信編　⇨白井年表，弘化２年項
蔭涼軒日録（いんりょうけんにちろく），続史料大成，臨川書店
色葉字類抄（３巻本）　⇨中田祝夫・峯岸 明，色葉字類抄研究並びに総合索引（黒川本影印篇），風間書房
岩崎灌園由緒書　⇨本草百家伝，白井光太郎著作集６，科学書院
上野年表➡上野益三，年表日本博物学史，八坂書房
遠西舶上画譜，馬場大助，東京国立博物館蔵
御薬草木書留（寛政三年改），小石川御薬園作成　⇨日本薬園史の研究
お湯殿の上の日記，続群書類従・補遺３，続群書類従完成会：翻刻　⇨磯野直秀（2006）
下学集（永禄２年本）　⇨下学集・三種，東京大学国語研究室資料叢書14，汲古書院：影印
花壇綱目（初稿写本），水野元勝，国会図書館蔵
花壇地錦抄，伊藤伊兵衛三之丞，八坂書房：翻刻

花木園芸，宮沢文吾，八坂書房：復刻版
花木真写，近衛予楽院，北村四郎解説，淡交社：影印　⇨植物文化史
花譜・菜譜，貝原益軒，八坂書房：翻刻
帰化植物，久内清孝，科学図書出版社
九淵遺珠，丹羽正伯，岩瀬文庫・杏雨書屋蔵
草花絵前集，伊藤伊兵衛三之丞，平凡社東洋文庫：翻刻
屈佚草記，山本榕室　⇨指佞草ノ記，国会図書館蔵
広益地錦抄，伊藤伊兵衛政武，八坂書房：翻刻
古典植物辞典，松田 修，講談社
言継卿記➡ときつぐ……
駒場薬園有高帳➡駒場御薬園御薬草木当時御有高帳，享和元年改／天保二年改，国会図書館蔵
雑纂➡植物図説雑纂，伊藤圭介・伊藤篤太郎編，国会図書館蔵
薩摩博物学史，上野益三，島津出版会：出典を詳しく記してある
山海庶品，佐藤成裕，国会図書館蔵：特7-18
四季の花事典，麓 次郎，八坂書房
地錦抄附録，伊藤伊兵衛政武，八坂書房：翻刻
資源植物事典，柴田桂太編，北隆館
拾品考，野田青葭，国会図書館ほか蔵：刊本
鍾奇遺筆，岩永文禎，国会図書館蔵
諸禽万益集，左馬之助，国会図書館ほか蔵：後書に草木の名称を列挙した個所がある
植物渡来考，白井光太郎，岡書院
植物文化史，北村四郎，保育社
白井年表➡［改訂増補］日本博物学年表，白井光太郎，大岡山書店
新渡花葉図譜，渡辺又日菴，国会図書館蔵　⇨磯野（2007）
成形図説（巻１～30），曽 占春など編，国本出版社，影印：巻31～45は写本で伝わる
草花図譜，著者不明，東京国立博物館蔵：和1033
草木花写生図巻，狩野探幽，東京国立博物館蔵　⇨植物文化史
草木錦葉集，水野忠暁著，北村四郎ほか解説，青青堂：影印＋解説
草木写生，狩野重賢，国会図書館蔵　⇨磯野（2004B）
草木図説（草部）➡草木図説，飯沼慾斎，永楽屋東四郎版，国会図書館蔵
草木図説（木部），飯沼慾斎著，北村四郎解説，保育社：図の影印＋文の翻刻　⇨花の研究史
鷹峯官園雑記　⇨「鷹峯官園雑記」，宗田 一，医薬ジャーナル，30巻10号
田村公用日記，田村藍水・田村西湖，続群書類従完成会：翻刻
竹園草木誌➡朝暾集，貴志忠美，冊８（冊題，竹園草木誌），国会図書館蔵
竹園草木図譜，貴志忠美，岩瀬文庫蔵
常信写生図巻➡草花魚貝虫類写生図，狩野常信，東京国立博物館蔵　⇨磯野（2004A）

中山草木　⇨質問草木略，曽 占春，国会図書館蔵
天保度後蛮舶来草木銘書　⇨日本園芸史，白井光太郎著作集３，科学書院：原本は『花形簿』（編者未詳，国会図書館蔵）に所収
桃洞遺筆，小原桃洞，恒和出版：影印
言継（ときつぐ）卿記，山科言継，国書刊行会編，続群書類従刊行会：翻刻　⇨磯野（2006）
日葡辞書➡［邦訳］日葡辞書，土井忠生ほか編訳，岩波書店／［邦訳］日葡辞書索引，森田武編，岩波書店
日本物産年表，田中芳男，十文字商会
日本薬園史の研究，上田三平著・三浦三郎編，渡辺書店
農業事物起源集成，大野史朗，青史社
梅園草木花譜，毛利梅園，国会図書館蔵
花の研究史，北村四郎，保育社
百花培養集，松平定朝，嘉永元年序本，国会図書館蔵：特1-486
百品考，山本亡羊，科学書院：影印
物産宝庫，田中芳男，国会図書館蔵
物品識名・物品識名拾遺，水谷豊文，青史社：影印
物類品隲，平賀源内，平賀源内全集，名著刊行会：翻刻
文明本節用集➡文明本節用集研究並びに索引，中田祝夫・小林祥次郎，勉誠社：影印
本草学と洋学，遠藤正治，思文閣出版
本草綱目啓蒙（重訂版），小野蘭山，平凡社東洋文庫：翻刻
本草綱目纂疏，曽 占春，国会図書館ほか蔵
本草写生，貴志忠美，国会図書館蔵：特1-3309
本草写生図譜，山本渓愚著，北村四郎解説，雄渾社：影印　⇨植物文化史
本草図譜，岩崎灌園著，北村四郎解説，同朋舎出版：影印　⇨本草図譜総合解説，北村四郎ほか，同朋舎出版／花の研究史
本草の植物，北村四郎，保育社
本朝世事談綺，菊岡沾凉，日本随筆大成，Ⅱ－12，吉川弘文館：翻刻
松平大和守日記，松平直矩，日本庶民文化史料集成，第12巻，三一書房：翻刻
水谷記聞➡本草綱目記聞，水谷豊文，杏雨書屋蔵（原本）・国会図書館蔵（部分，転写本）
明月記，藤原定家著，今川文雄訓読，河出書房新社
山科家礼記（やましなけらいき），史料纂集１，続群書類従完成会：翻刻　⇨磯野（2006）
大和本草，貝原益軒，有明書房：翻刻
洋舶盆種移殖の記，宇田川榕斎　⇨植物渡来考・付録：翻刻
落葉，北村四郎，保育社
ラホ日辞典➡ラホ日辞典の日本語，金沢大学法文学部国文学研究室編，ラホ日辞典索引刊行会
和漢三才図会，寺島良安，平凡社東洋文庫：翻刻

磯野直秀（1997），日本博物学史覚え書５，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，22号
磯野直秀（2002），日本博物誌年表，平凡社
磯野直秀（2004A），博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生図』，ＭＵＳＥＵＭ（東京国立博物館研究誌），590号
磯野直秀（2004B），狩野重賢画『草木写生』，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，36号
磯野直秀（2006），博物誌資料としての『お湯殿の上の日記』，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，40号
磯野直秀（2007），『新渡花葉図譜』：幕末渡来植物の一資料，参考書誌研究，67号
遠藤正治（2000～01）：遣米・遣欧使節のもたらした植物についての下記報文を参照。
遠藤正治（2000），遣米・遣欧使節齎来の植物を記載した「草木図説遺稿」の発見，慾斎研究会だより，90号
遠藤正治（2000），慾斎が山本榕室に贈った遣米使節齎来の植物，慾斎研究会だより，91号
遠藤正治（2001），慾斎が山本榕室に贈った遣欧使節齎来の植物，慾斎研究会だより，93号
遠藤正治（2001），伊藤圭介が大河内家に送った植物，伊藤圭介日記，第７集，東山植物園
榊原吉郎（1995），十八世紀の植物写生，『東アジアの本草学と博物学の世界』，思文閣出版
田代和生（1999），朝鮮薬材調査の研究，慶應義塾大学出版会
原 平三（1943），蕃書調所の科学及び技術部門に就て，帝国学士院紀事，２巻３号

謝辞

本年表の作成に当っては，遠藤正治氏，小笠原 亮氏，および故岩佐吉純氏から多くの御教示を頂きました。この場を借りて，厚く御礼を申し上げます。

植物名索引

品名欄・注記欄に記載した品名の掲出年を挙げた。また，たとえば1818〜29は文政年間を示す。下線を付した場合は，注記欄に記載。品名では，ヰ➡イ，ヱ➡エ，ヲ➡オと変えてある。

アオギリ 1481，1666
アカツメクサ 1860
アカネスイセン 1844
アカバナレンゲ 1848〜53，1860
アサガオ 914
アザミゲシ 1860
アザミヤグルマ 1854
アズキ 712
アスパラガス 1770，1775，1839
アダン 1823
アーティチョーク 1736
アナナスボーム➡パイナップル
アブラギリ 1658〜60
アブラナ 918，1181，1592
アフリカン・マリーゴールド 1664
アマ 1688〜1703
アマオマモルリスブル 1844〜47
アマリリス 1830〜43
アメリカチョウセンアサガオ 1862
アメリカナデシコ 1863
アラセイトウ 1660
アリッサム 1862
アルファルファ 1862
アロエ 1859
アンジャベル 1644〜60，1733
アンズ 914
アンペラ 1814
イガホオズキ 1862
イカリソウ（漢種）1805
イザヨイバラ 1709，1805，1829
イステサガシネヤ➡サンゴバナ
イセハナビ 1809，1853，1866
イチゲハマベズイセン 1849
イチジク 1619，1631
イチハツ（一八）1500
イチビ 918
イチョウ 1444
イトラン（糸蘭）1854〜59
イボサボテン 1867
イモカタバミ 1855
イユスチシア 1853
イリモテラン（入面蘭）1809
イロマツヨイ（色待宵）1862
ウケユリ（承百合）1804
ウコン（鬱金）1662
ウスベニカノコソウ 1860
ウチワサボテン 1717
ウツボグサ 1792
ウメ 705
ウルシ 720
エイケンラシヤ 1863
エーケンベルラア 1861
エゴイテンパータツリ 1852
エゴイランタータツリ 1852
エゾギク 1719
エニシダ 1673〜80，1697
エンジュ（槐）918
エンダイブ 1714
エンドウ 1181
オウコチョウ（黄胡蝶）1830〜43
オウゴン（黄芩）1725
オウゴンソウ（黄金草）1776，1844
オウバイ（黄梅）1488，1666
オオアザミ 1848〜53
オオキンバイザサ 1849
オオグルマ 1709
オオケタデ 1666
オオサンザシ 1765，1844
オオセンナリ 1855
オオバナアザミ 1769
オオバナオケラ 1728
オオバナソケイ 1818〜29
オオバノセンナ 1846
オガサワラビロウ 1863
オキザリスローザ 1842
オクラ 1854
オグラギク 1665
オジギソウ 1842，1846
オシロイバナ 1698，1699
オニゲシ 1867
オニマユハキ 1672
オニユリ 1492
オランダイチゴ 1844
オランダカイウ（海芋）1843
オランダスイセン 1758，1827
オランダセキチク 1644〜60，1733
オランダゼリ 1709
オランダセンニチ 1842
オランダダンドク 1765
オランダチシャ 1714
オランダハッカ 1818，1839
オランダフウロ 1830〜43，1848
オランダミツバ 1598
オランダワレモコウ 1762，1809，1814，1847
オリエンタル・ポピー 1867
オリーブ 1595，1861〜63
オロチ（大蛇）1859
カイコウズ（海紅豆）1848
カイドウ（海棠）1444
カイマンゴロウ 1859
カエンソウ（火焔草）1851
カカヤンバラ 1830
カキ 758
カクラン（鶴蘭）1765，1829
カコソウ（夏枯草）1792
カザグルマ 1631，1645，1702
カジノキ 918
ガジュツ（莪茂）1632，1830
ガジュマル 1771
カセイマル（花盛丸）1854〜59
カッコウアザミ 1860
カーネーション 1644〜60，1863
カボチャ 1579，1608，1674
カボチャ（クリカボチャ）1863
カマヤマショウブ 1780，1844
カミルレ，1818，1843
カラー 1843
カラタチ 785
カラナデシコ（石竹）1001
カラン（花蘭）1829
ガランガ 1851，1853
カリフラワー 1862
カリン 1400
カワタケ（川竹）935
カンゾウ（萱草）785
カンツワブキ 1829
カンナ 1856
カンノンチク 1688
ガンピ（ナデシコ科）1490
カンボウラン（寒鳳蘭）1829
カンボタン（寒牡丹）1663

カンラン（橄欖）1759
キアイ（木藍）1853，1855
キキョウナデシコ 1860
キク 751，1674
キクイモ 1861
キクイバラ 1698
キクヂシャ 1714
キクバテンジクアオイ 1866
キササゲ 1666
キズイセン 1815，1844
キソケイ（黄素馨）1824
キダチチョウセンアサガオ 1851
キダチトウガラシ 1851
キチョウジ（黄丁字）1860
キバナハギ 1848，1853
キバナルピナス 1861
キバラ（黄薔薇）1709
キブネギク（貴船菊）1500
キマメ（木豆）1839
キャベツ 1860
キュウリ 784
キョウオウ（薑黄）1716～35
キョウチクトウ 1713，1764
ギョクチンラン（玉沈蘭）1825，1829
ギョボク（魚木）1844～47
キヨマサニンジン 1598
ギョリュウ（御柳）1741～43，1826
キリ（桐）918
キリカズラ 1862
キリトリア➡チョウマメ
キリンカク（麒麟角）1763，1827
キワタ 1759
キンカキツバタ 1725，1748
キンカン 1444
キンギョソウ 1856
キンケイギク 1844～47，1864
キンケマル（金毛丸）1861
ギンケマル（銀毛丸）1852
キンゴウカン（金合歓）1838，1844，1852
ギンゴウカン（銀合歓）1853
キンゴジカ 1830
キンサンジコ（金山慈姑）1830～43
キンシバイ（金糸梅）1717
キンセンカ 935，1674，1849
ギンセンカ 1492，1673
キンチャクサボテン 1867
キンデマリ（金手鞠）1861
ギンデマリ（銀手鞠）1852
キンホウ（金鳳）1830～43
キンモクセイ 1719
ギンモクセイ 1492，1713
キンリョウヘン（金稜辺）1828
グアバ 1829
クネンボ（九年母）1500，1827
クマタケラン 1805
グラジオラス 1857
クリアンサス・プニケウス 1868
クリカボチャ 1863
クリナム 1858
クレタケ 914
クロタネソウ 1728，1862
クロツグ 1844
クローバー 1846
クロフネツツジ 1661～72
クワ 720
クワズイモ 1829
グンバイナズナ 1776、1786
ケイトウ 785
ケシ 1007
ゲッカコウ（月下香）1758，1827
ケマンソウ（華鬘草）1481
ケラマツツジ 1661～72
ケレイネドンドルバールド 1848～53
ゲンゲ 1525
コウオウソウ 1664，1699
コウシンバラ 914，1213，1309，1491
コウシンバラ・白，1491
コウヨウザン（広葉杉）1809，1829
コウライギク 1488，1563
コカキツバタ 1491，1725，1828
コーカサスマツムシソウ 1862
コガネヤナギ 1725
コキリカズラ 1862
コクチナシ 1709，1827
コクリュウ（黒龍）1854～59
コゴメバナ 1698
ココヤシ 1725，1848
ココンリン（古金輪）1829
ゴジカ（午時花）1492，1645
ゴシュユ（呉茱萸）1731
コスモス 1862
コデマリ（小手鞠）1645
コノテガシワ 1696
ゴミシ（五味子）1716～35
コムギセンノウ 1860
ゴモジュ 1828
ゴヤオギ 1680，1698
ゴヤバラ 914，1695，1736
コリヤナギ 1635，1825
コロイヂイル・ルメイニイト 1842
コンタラエルハ 1855
コンチョロ 1842
コンロンカ（崑崙花）1844
サクコウ（醋甲）➡ムラサキナツフジ
サクラキリン 1859
サクラバラ 1736
サクラマンテマ 1862
サクララン 1809，1829，1837
ザクロ 918，1219
ササブドウ（瑣々葡萄）1819
サッコウ（醋甲）➡ムラサキナツフジ
サッコウフジ➡ムラサキナツフジ
サツマイモ 1611
サツマギク 1719
サツマフジ 1659
サトウキビ 1666
サトウダイコン 1860
サフラン 1863
サフランモドキ 1845，1849
サボテン類 1644～47，1717，1857，1859，1854～59，1867
ザボン 1709，1827
サラダナ 1775
サラタラリヤ 1861
サルスベリ 1645，1682
サルビア 1818，1823
サルメンバナ 1862
サンゴジュナ 1704～15
サンゴバナ 1853
サンザシ（山査子）1726，1734，1736
サンシキヒルガオ 1862
サンジソウ 1862
サンシチソウ（三七草）1611

サンシュユ 1709，1765
サンダンカ（三段花）1645，1706
サンユウカ（三友花）1866
ジオウ（地黄）1603，1822
シオン（紫苑）914
シカクダケ 1711～15
ジギタリス 1860
シクラメン 1868
シクンシ（使君子）1716～35
シゲンジ 1659
シコウラン 1829
シジミバナ 1698，1765
シダレヤナギ 751，785
シナガワハギ 1676
シマニシキソウ 1863
シマミサオノキ 1829
シモクレン（紫木蓮）918
シャガ 1491
ジャガタラスイセン 1830～43
ジャガタラユリ＝ジャガタラスイセン
シャクヤク 818，1674
シュウカイドウ（秋海棠）1641
シュウメイギク（秋明菊，貴船菊）1500，1674
シュクシャ 1851，1853
ジュズダマ 918
シュッコンアマ（宿根亜麻）1860
シュロ 918
シュロチク（棕櫚竹）1631，1666
シュンギク（春菊）1563，1666
ショウジョウカの雑種 1844～47
ショウトウ（省藤）1799
ショカツナ（諸葛菜）1704～15
シロチョウマメモドキ 1850
シロツブ 1804～17
シロツメクサ 1846
シロノセンダングサ 1830～43
シロバナソシンカ 1855
シロボシベゴニア 1861
ジンコウ（沈香）1817
ジンチョウゲ 1481，1674
ズイカク（蕊核）1759
スイセン 1444
スイセンアヤメ 1841，1847
スイゼンジナ（水前寺菜）1759
スイートピー 1860
スイフヨウ（酔芙蓉）1844
スイヨウヒ（酔楊妃）1484
スカヒオサ 1806
スギモトケイトウ 1844～47
スズナリヤ➡ナンバンタヌキマメ
スモモ 720
スルガラン 1657，1717
セイテラボーム 1859
セイヨウバラ 1644～60
セイヨウマツムシソウ 1806
セイヨウリンゴ 1861～63
セキチク（石竹）1001
ゼニアオイ 1491，1662
ゼラニウム 1864，1866
セリニンジン 1631
セレイテイヤ 1860
セロリ 1598
センジュギク 1664
センナリホオズキ 1805，1823
センニチコウ（千日紅）1664
センニンコク（仙人穀）1814，1822
センノウ（仙翁）1378
センリゴマ（千里胡麻）1765
ソウシシ（相思子）1832
ソウジュツ（蒼朮）1727
ソケイ（素馨）1802，1814，1828
ソシンラン（素心蘭）1825，1829
ソテツ 1488，1666
ソテツナ 1778
ソラマメ 1595
ダイコン 712
ダイズ 712
タイハク（太白）1496
タケシマユリ 1664，1699，1848
タコノキ 1675，1863
タチアオイ 918，1645
タチバナ（橘）712
タチビャクブ 1716～35
タネナシブドウ 1819
タバコ 1592～95，1599，1835
タマネギ 1775，1860
タマノカンザシ 1733，1829
タマリンド 1844
タモトユリ 1673～80，1699
ダリア 1841，1842，1846
ダリヤス 1847
ダンギク 1709，1736，1833
タンケマル（短毛丸）1859
ダンコウバイ（檀香梅）1716～35
ダンチョウゲ（段丁花）1814，1824
ダンドク（壇特）1664，1699，1765
ダンドク（壇特，黄花）1765
チシャ 734
チャ 805，1191
チャボツキミソウ 1868
チャラン 1644～60，1680
チャンチン（椿）1481
チューリップ 1863
チョウジ（丁香）1848
チョウシュン（長春）1213
チョウシュン（長春，白）1491
チョウセンアサガオ 1484，1672，1699
チョウセンアザミ 1736
チョウセンカサユリ 1673～80
チョウセンゴミシ 1716～35
チョウセンザクロ 1709
チョウセンサンザシ 1844
チョウセンニンジン 1721
チョウマメ（蝶豆）1851，1855
チンコウ（沈香）➡ジンコウ
ツキミソウ 1847
ツタバキリカズラ（蔦葉桐葛）1863
ツバメズイセン 1868
ツメクサ（詰草）1846
ツルナシナタマメ 1851
ツルビャクブ 1716～35
ツルムラサキ 1631
ツルレイシ 1603
テッセン（鉄線）1500，1550，1631
テッポウユリ 1695，1699，1800
テンジクアオイ 1864，1866
テンジクボタン（天竺牡丹）➡ダリア
テンニンカ（天人花）1738
テンニンギク 1868
テンネボーム 1858
テンノウメ（天の梅）1844
トイフルスメルキ 1859
トウアズキ 1832
トウカエデ 1727
トウガラシ 1592～95，1756

ドウカンソウ（道灌草）1719, 1765
トウギリ（唐桐）1664, 1668
トウキンセン（唐金盞）935, 1830〜1843, 1849
トウサイカチ 1818〜29
トウジュロ（唐棕櫚）1695
トウセンダン 1844
トウチクラン（唐竹蘭）1789
トウツツジ 1661〜72
トウツバキ 1673〜80
トウツルモドキ 1799
トウモロコシ 1579
トウロウバイ（唐蝋梅）1716〜35
トウワタ 1842
トキワギョリュウ 1858
トキンイバラ 1680, 1698, 1829
トクサラン 1789, 1842
トケイソウ 1598, 1642, 1717, 1827
トコナツ（常夏）1007
トックリイチゴ 1721
ドデカテオン 1868
トマト 1668, 1703
ドリコス 1850
ドルレケルフル 1830〜43
トロロアオイ 1492, 1645, 1666
トロロアオイモドキ 1851
ナガオシロイバナ 1862
ナガキンカン（長金柑）1713
ナガルポーム➡グラジオラス
ナス 734
ナタネ 1181➡アブラナ
ナタマメ 1603
ナツザキフクジュソウ 1860
ナツシロギク 1862
ナツズイセン 1644〜60
ナツメ 758
ナニワイバラ 1670
ナフトール 1758
ナンキンハゼ 1709, 1731
ナンテン 1230, 1713
ナンテンソケイ 1861
ナンバンアカアズキ 1848
ナンバンカンゾウ（南蛮萱草）1844
ナンバンクサフジ 1852
ナンバンサイカチ 1770
ナンバンタヌキマメ 1851, 1855
ニオイイリス 1867
ニオイレセダ 1828
ニガウリ 1603
ニガタケ（苦竹）935
ニクイロシュクシャ 1853
ニチニチソウ 1717, 1777
ニッケイ 1681〜83, 1725, 1829
ニホンカボチャ 1579, 1863
ニュウメンラン（入面蘭）1809
ニワウメ 720, 1366
ニワザクラ 720, 1128, 1309
ニンジン（薬用）➡チョウセンニンジン
ニンジン（食用）1631
ニンジンボク 1716〜35, 1827
ネジアヤメ（馬藺）1492, 1699
ネモフィラ 1860
ノウゼンカズラ 918, 1658
ノウゼンハレン 1845, 1848, 1849
ノゲイトウ 1631
ノボタン 1809, 1844
バアークラヤナ 1863
パイナップル 1845
ハイナス 1860
バイモ（貝母）1674
ハウチワマメ 1859
ハオウベン（覇王鞭）1763
ハカタユリ 1631, 1645
ハカマオニゲシ 1862
ハクサイ 1852
ハクセン（白鮮）1716〜35
ハクチョウゲ（白丁花）1491, 1703
ハクチョウソウ（白蝶草）1862, 1866
ハクモクレン 1677
ハクラン（白蘭）1829
ハゲイトウ 1001
ハサボテン 1851
ハシカンボク 1804〜17, 1818〜29
バショウ 818, 1160
ハス 712
ハズ（巴豆）1721, 1790, 1827
ハゼノキ 1673〜80, 1765
パセリ 1709, 1775
ハチク（淡竹）914
ハッカサイ（白花菜）1771
ハツユキソウ 1868
ハトヤバラ 1670
ハナアオイ 1862
ハナカイドウ 1444, 1746, 1822
ハナカタバミ 1842
ハナカンザシ 1863
ハナキリン 1858
ハナジオウ 1765
ハナシャジン（花沙参）1721
ハナズオウ 1446, 1684
ハナヅルソウ（花蔓草）1829
バナナ 1863
ハナビシソウ（花菱草）1830〜43
ハナモモ 1765
ハネズ➡ニワウメ
ハブソウ 1794
バーベナ 1860
ハボタン 1704〜15, 1717, 1735
ハボテン➡ハサボテン
ハマナス 1644〜60
バラ 914, 1644〜60
バラモンジン 1835
ハラン（葉蘭）1717
ハリアサガオ 1748, 1765
ハリエニシダ 1862
ハリナスビ 1844, 1849, 1851
バリン（馬藺）➡ネジアヤメ
ハルウコン 1716〜35, 1820
ハルシャギク 1847
バンウコン（蕃鬱金）1842
バンガジュツ（蕃莪朮）1849
パンジー 1860, 1866
バンジロウ 1829
バンマツリ（蕃茉莉）1859
ヒアシンス 1867
ヒイラギナンテン 1681〜87, 1736
ヒエンソウ（飛燕草）1862
ビオラ・ルテア 1868
ヒガンバナ 1484, 1666
ヒギリ（緋桐）1664, 1668
ヒコウキソウ 1868
ビジョナデシコ（美女撫子）1863
ビジンショウ（美人蕉）1681〜83
ビジンソウ（美人草）1645
ビッキ 1844

ヒナギク 1868
ヒナゲシ 1645，1666
ヒマ 1863
ヒマワリ 1664，1666
ヒメオキザーリス 1855
ヒメキンギョソウ 1862
ヒメザクロ 1709
ヒメサボテン 1867
ヒメバショウ 1681～83
ヒモゲイトウ（紐鶏頭）1814，1822
ヒモサボテン 1867
ヒモスギラン 1829
ビャクジツ（白朮）1728
ヒャクニチソウ 1860
ビャクブ（百部）1716～35
ヒヤシンス➡ヒアシンス
ヒヤシンド 1815
ヒョウタン 712
ビヨウヤナギ 1603，1674
ヒレアザミ 1672
ビロウ 1695
ヒロハノハナカンザシ 1862
ビワ 918
ピンプルネルラ➡オランダワレモコウ
ビンロウ（檳榔）1720，1848
フウ（楓）1727
フウチョウソウ（風蝶草）1771，1786
フウリンソウ 1862，1864
フクシア 1858
フジゲイトウ 1844～47
フジバカマ（藤袴）785
フジモドキ 1659
ブッシュカン（仏手柑）1595
ブッソウゲ（仏桑花）1500，1544，1609，1661～72，1706
ブドウ 1186，1819
フトモモ（蒲桃）1812，1824
フユアオイ 734
フユボタン 1663，1683
フヨウ（芙蓉）1281，1666
フランスギク 1862
フレンチ・マリーゴールド 1664
ヘキトウ（碧桃）1444
ベゴニア 1851，1861
ヘチマ 1595
ペチュニア 1860
ベニカノコソウ 1862
ベニスジアマリリス 1849
ベニニガナ 1860
ベニバナ 785
ベニバナアマ 1862
ベニバナインゲン 1860
ベニバナサルビア 1865
ベニバナツメクサ 1860
ヘビウリ 1862
ホウオウチク（鳳凰竹）1827
ホウキギ（帚木）918
ホウケン（宝剱）1854～59
ホウサイラン（報歳蘭）1784
ホウセンカ（鳳仙花）1454，1675
ホオズキ 712
ホクシア➡フクシア
ボケ 918
ホザキノイカリソウ 1805，1833
ボサツイバラ 1695，1736
ボスメン 1844
ホソアオケイトウ 1844～47
ホソバオケラ 1727
ホソバノサンジソウ 1860
ボダイジュ（菩提樹）1190
ボタン 806，971，1674
ボタンバナ 1698
ボタンバラ 1644～60
ホテイチク（布袋竹）1709
ホトウ（蒲桃）1812，1824
ホンキンセンカ 935，1674，1822
ボンテンカ（梵天花）1603，1844
ホンニッケイ 1774
マイカイ（玫瑰）1644～60，1709
マイハギ（舞萩）1852
マオウ 1727
マガリバナ（歪り花）1862
マダケ 935
マツバナデシコ 1868
マツバボタン 1860
マツヨイグサ 1851，1868➡ツキミソウ 1847注
マツリカ（茉利花）1500，1609，1700
マメアサガオ 1850
マメキンカン 1789～1800
マユハケオモト 1868
マヨラーナ 1860
マリーゴールド 1664
マルバアサガオ 1832
マルバタバコ 1835
マルバニッケイ 1829
マルバルコウ 1850
マルメロ 1595
マンテマ 1851
マンネンロウ 1680
ミカイドウ 1444
ミツマタ 1614，1674
ミョウガ 758
ムギ 712
ムギワラギク 1860
ムクゲ（木槿）1281，1444
ムシトリナデシコ 1862
ムラサキオモト 1816，1827
ムラサキナツフジ 1716～35，1804～17，1830～43
ムレゴチョウ 1862
ムレスズメ 1826
メイテツコウ（迷迭香）1680
メキャベツ 1860
モウソウチク 1736，1771，1779，1801～03
モクキリン（木麒麟）1865
モクセイ 1444，1492，1713，1719
モクセイソウ 1828
モクレン➡シモクレン，ハクモクレン
モクワンジュ 1852
モダマ（藻玉）1805
モッコウ（木香）1709
モッコウバラ（白）1760
モッコウバラ（黄）1849
モミジアオイ 1863
モモ 712
モモイロタンポポ 1862
モンテンジクアオイ 1864
ヤエヤマノイバラ 1830
ヤキバラン（焼刃蘭）1829
ヤグルマギク 1860
ヤシ➡ココヤシ
ヤナギ➡シダレヤナギ
ヤハズカズラ 1860
ヤブカンゾウ 785，1666
ヤライコウ（夜来香）➡ゲッカコウ

ユウガオ 1001
ユウギリソウ 1862
ユズ（柚子）918
ユスデシヤカンネヤ 1853
ユスラウメ 1603，1661
ユッコウフラチデ 1854〜59
ユーホルビア➡キリンカク
ヨウシュチョウセンアサガオ 1862
ヨルガオ 1854
ラウザイバラ 1709
ラウツマレイナ 1680
ラカンマキ 1424，1827
ラズベリー 1860
ラッカセイ 1675
ラノンケル 1841
ラベンダー 1860
リクチメン（陸地綿）1860
リュウガン 1659，1800，1849
リュウキュウアヤメ 1780
リュウキュウエビネ 1829
リュウキュウオウバイ 1825
リュウキュウハゼ 1673〜80
リュウキュウハンゲ 1825，1829
リュウキュウユリ 1695，1699，1800
リュウゼツラン 1859
リンゴ➡セイヨウリンゴ，ワリンゴ
ルコウアサガオ 1850
ルコウソウ 1624〜43
ルピナス 1862
ルリハコベ 1818
ルリハッカ 1862
ルリヤナギ 1854〜59
レイシ（荔枝）1659，1844〜47
レタス 1862
レダマ 1645，1666
レモン 1715
レンギョウ（連翹）1666，1674
レンゲ（ゲンゲ）1525
ロウバイ（蝋梅）1484，1666，1674
ロウザ 1644〜60
ローズマリー 1680
ロゼルソウ 1851
ローレア - ベスペルチリオニス 1868
ワスレナグサ 1862
ワタ 799，1469〜86，1860
ワニグチモダマ 1805，1835
ワリンゴ（和林檎）918，1478
ワンピ（黄枇）1785